

# 冷たい雨に咲く 紅い花



月ノ灯リ

冷たい雨。

今朝から続く十月下旬の雨は、いつもより帰りが遅くなった私を更に追い立てた。  
でも、街の灯が満ちていて、不安はなかった。

「え！もうこんな時間？ テレビ始まっちゃう」  
鮮やかなピンクのケータイで時間を見ると、二十時半の表示。  
すると、すぐにケータイが振動して、驚いた。

着信 ジュン兄〈ジュンニイ〉

その表示に、安心な気持ちと、マズい……と、複雑な気持ちになる。

「ジュン兄？ ちょっとバイト伸びちゃって。でももうすぐ帰るから——」

慌てて聞かれてない説明までしていたら、

『いいか実織（ミオリ）！ 絶対オレが迎えに行くまでバイト先で待ってろ！ いいな？』

心配性の兄、ジュン兄の携帯越しの声に、

「大丈夫だよ、ジュン兄。周り灯で明るいし、暗い道はダッシュで帰るから」

そうって、暗い路地裏を走りながら元気に笑った。

『バカ！ 甘いんだよ、お前は——』

ジュン兄の過保護ぶりに、心配し過ぎ、そう言おうとした時——

ザアア——

響く、雨音。

変わらず降り続ける、雨。

なのに私は、自分の紅い傘を手放した。

正確には、思わず傘を落としてしまった。

それほど驚いた。

目の前の光景に——。

目の前は、紅い海。

降り続く雨と、紅い色が混ざり合っていた。

なに？ これ？

『おい実織？ 聞いているのか？』

ジュン兄の声が、近いはずなのに、遠く、聴こえる。

『灯りで明かるいったって、それは表だけだからな？』

目の前に、

紅く染まった人が、倒れていた。

「う、そ……」

小さく、小さく、

やっと出た、言葉。

『間違っても、近道とかって裏通り使うんじゃないぞ？』

もう……

遅いよ！ ジュン兄——！

紅いのは血だと分かるのに、時間はかからなかった。

雨の匂いに混じる、血の匂い。

その人は、死んでいる。

そう、すぐに思える程、辺りは紅く染まっていた。

どうしよう、

どうしよう、

はやく、ここから離れなきゃ——…

あっ、きゅ、救急車！ それとも警察に……？

ずぶ濡れになりながら巧く回らない頭で考えていると、

グイッ！

「いたっ！」

不意に、思い切り腕を引っ張られて声をあげてしまい、

カシャ、

携帯を落としてしまった。

掴まれた手の方を振り返ると、

「おいっ！」

黒いスーツ姿に黒い眼鏡。黒い手袋姿の大柄な男達が、いつの間にか私を取り囲み、そのうちの一人が私の腕を掴んでいた。

「お前が殺ったのか」

「——え？ ち、ちがっ……」

反論しようとするけど、言葉が続かない。

誰？

警察？

ううん、警察じゃ、ない……

私の頭はもう、何を考えているのかさえ分からない程、  
グルグル回っていた。

黒い男達は、ヒソヒソと話し始める。

なに？ やだ……

知らず、涙が溢れる。

怖い、

助けて、

助けて、ジュン兄！

怖いー！

バッ

思い切り腕を振りほどいたら、男は気を抜いていたのか思いのほかあっさりと手が振りほどけた

。

私は、後ろを振り返らず走った。

「待て！」

追いかけてくる男達の声。

やだ、怖い！

「追え！ 逃がすなっ」

誰か、誰か、

助けて！

キィィイツ

目の前の細い路地に、黒い車が止まり、

ガチャッ

「乗れ！」

車のドアが開くと同時に、車の男の人が叫ぶ。何が起きているのか私の頭はパニック状態。

でも、

「早くしろっ」

煙草をくわえた車の男が、大きな声で叫ぶ。

私は、追われる声から逃れたくて男の車に、乗った。車は、私を乗せると同時、その場から急発進した。

窓の外では悔しそうな黒い男達の姿が、遠くなる。

は、あー.....

思わず、大きな安堵のため息が零れた。

た、助かった.....

「助かったよ」

え？

心の声が言葉で出たのかと思ったら、声の主は、車を運転する煙草の男だった。

「キミが通りかかったおかげで、オレはアイツらに見つからずにすんだ」

え？ なに？

そ、それって.....

煙草の男を見ると、

黒いスーツに黒いコート。そして、黒い手袋。

って、まさか.....

「あなた、.....さっきの男達の、仲.....間？」

助手席で膝を抱え、おそるおそる問いかける。

「まさか、ヤツラと一緒にすんなよ」

じゃあ.....

《お前が殺ったのか？》

《キミが通りかかったおかげで、オレはアイツらに見つからずにすんだ》

憶い出す、言葉の数々.....。

甘い煙草の匂いが、私を包む。

「.....まさか、...あの、倒れていた人って.....」

「ああ、オレが殺った」

さらりと、その男は言った。

「—っ！」

あまりの衝撃に、声が出ない。

どうしようっ!?

とんでもない車に乗っちゃった!!

まさか、

まさかっ—...

車に乗せたのも、私を殺すために.....!?

どうしよう、どうしよう—!!

ジュン兄—!!

ガタガタと体が震え、背中を、冷たい汗が流れる。

「そう、警戒すんな。何も、キミを殺そうってんじゃない」

男は前を向いたまま、平然と話す。

その言葉に、私は、固まり震えていた体が、緩むのを感じた。

「.....ホント、に？」

「ああ、本当だ」

じゃあ、

「じゃあ...どうして、私を車に乗せてくれたん、ですか...？」

ガタガタと震えていた体が、少しずつ、少しずつゆるみ始める。

でも、

「どうして？」

男は口の端で可笑しそうに笑う。煙草の煙が、舞い上がる。

そして、

「男が女を連れ去るのに、難しい理由がいるのか？」

男のその言葉に、私は一気に青ざめた。

「やっ.....」

車から逃げようと、ドアに手をかける。

「やめとけ、今車から転がり落ちたら、骨の一本や二本じゃすまないぞ」

更に青ざめ、ドアにかけた手が止まる。

「いい子だ。なに、大人しくしてりゃ痛い思いせずにすむ」

なにそれっ、

どういう意味!?

やだっ、やだよ!

どうしよう!?

どうしよう、ジュン兄っ!

さっきよりも、

私の体も唇も、濡れた寒さと、怖さで、

震えが止まらなかった。

◇

「着いたぞ」

男は車を止め、私の方を向いた。

黒い髪に、切れ長の黒い目が印象的な、綺麗な顔立ちの男。

「降りろ」

そう男は言ったけど、そこが私のうちじゃないのは確かだった。着く前に大きな門をくぐり、どこかの屋敷の様な場所だったから。

「早く降りろ」

私は、首を横に思い切り振る。

ガタガタと体は相変わらず震えていて、降りようにも、降りられる様な状態ではなかった。

ち、と男は軽く舌打ちをすると、

男は外から助手席のドアを開け、助手席の私の腕を引っ張った。

「やっ...」

私の声は小さく響いただけで、夜の闇に消える。

抵抗虚しく、男は軽々と私を抱き上げ、まるで荷物を運ぶように私を肩に担いだ。

そして、大きな屋敷の扉を乱暴に開けると、

「静音（シズネ）!! 帰った。それと客だ」

屋敷に響く声で叫ぶ。

男は私を抱えたまま、構わずどんどん階段をのぼっていく。

そして、数ある部屋の中の一つのドアを足で蹴る様を開けると、その部屋の中にあるバスルームに私を放り込んだ。

「やだっ...、やめて!!」

やっと出た私の声は、男の表情一つ変える事は出来ず、

バンッ

と、バスルームの外から、男に鍵をかけられてしまった。

「開けてっ!! 家に帰して!!」

バスルームの白いドアを叩きながら、私は叫んだ。

「風呂あがったら開けてやるよ」

平然とした男の声が、ドア越しに聞こえる。

「大声出しても無駄だ。この屋敷はオレの家だ。助けはないぞ」

そう男の声がして、

ガックリと、

私はその場に座り込んでしまった。



助けなし、  
望みなし、  
携帯は落として来たまま……  
もう、呆然とするしかなかった。

コンコン

不意に、バスルームの扉がロックされ、

「タオルと、お着替えをお持ちしました。入室してもよろしいですか？」

女性の声がして、

あ！ はい、と私が答えると、滑り込む様にバスルームに一人の女性が入って来た。

ドア！ と思い銀色のドアノブに手をかけたが、すでに鍵がかけられていた。

な、なんて、素早いヤツっ……

「無駄ですよ。紘夜様には敵いません」

バスルームに入って来た女性がそう話す。

女性は二十歳前後、私より少し上にみえる。

栗色の長い髪を後ろでまとめ、黒いメイド服がとても似合う綺麗な人だった。

美女！ メイド！？

ってことは――

「あなたも、あの男に連れてこられたんですか！？」

私は思わず同士を見つけた嬉しさで、そのメイドさんの手を両手で掴んだ。

「一緒に逃げましょう！？ 二人ならきっと何とかなるよ！」

必死に訴える私を、メイドさんは冷静な目で見て、

「……逃げると言っても、ここは三階ですよ？ ドアの向こうには紘夜様がいらっしゃいますし」

淡々と答える。

「だ、だって！ 逃げなきゃ……あの男にいいように遊ばれて、すぐポイだよ！？ でなきゃ……」

さ、さっきの人みたいに……

「あ、明日には、ズ、ズドンと、や、やややられて……川に、うか、浮かんだり……」

「それか、一生捕われの身となって愛人生活とか……」

ポツリと、メイドさんが呟く。

ガーーーーン

ズドンて、川……

一生、愛人……

い、イヤ……。ぜ、絶対、イヤー！

真っ青になって、

真っ白になって、

私は、私は……

ガッ

私は高級そうなバスタブに乗り、バスルームの窓を開けてた。

「ーというのは冗談で、紘夜様は立派な方なので、ご安心をー…」

と、微笑むメイドさんが私の方を向いた時には、

「待ってて！ 私が助けを呼んでくるからっ」

そう言葉を残し、窓から外に抜け出していた。

ここは三階という事も、メイドさんの言葉も耳に入らない程、

私は、

真っ青で、

真っ白だった……

「開けてっ、家に帰して！」

女は震えながらも、

必死によく透る声で叫びながら、バンバンと大きな音を立てて、白い扉が揺らした。

悪いが、この扉はそんな柔じゃない。

「風呂あがったら、開けてやるよ」

女の声にも扉を叩く音にも動じる事なく俺は答え、そして、一応付け加える。

「大声出しても無駄だ。ここは俺の屋敷だ。助けは来ないぞ」

さらりとそう言うと、途端に音と声は止み、静かになった。

どうやら、やっと諦めたようだ。

やれやれ、

まいった。。。

俺は `客、がバスルームから出てこない様に外から鍵をかけ、近くの壁に寄り掛かった。

滴る雨の雫が、床の絨毯に染み渡る。濡れた前髪をかきあげると、

「紘夜（こうや）様」

目の前に差し出された、白いタオル。

静音が、心配そうに俺を見ていた。

「ありがとな、静音」

そう言って、俺は静音からタオルを受け取ると頭をガシガシ拭いた。

「お客様には、とりあえず、私の服をお貸ししてよろしいでしょうか？ 明日、お客様用のお洋服を用意いたしますので」

「ああ、頼む」

俺は黒いスーツの上着を脱ぎ、シャツの釦を幾つか外すと首元を緩めた。

「あの、それで紘夜様、お客様はどちらに？」

部屋を見渡す静音に、俺はバスルームを顎で示した。

「なかなか元気な娘だ。手こずるかもしれないが、頼む。静音」

「おまかせを」

そう言って、静音はタオルと着替えを持ってバスルームに向かう。

俺は鍵を差し込んだままバスルームを開け、静音が中に入ると、すぐに鍵を閉めた。

これで、ひとまず安心だな。

静音にまかせておけば、大丈夫だろう。雨に濡れたあの格好のままでは、あの `客、は風邪をひく。

それに、あの場所を見られ、ヤツらにも見つかった様だ。

さて、

どするかな.....

そんな事を考えていたら、

バンバンッ

「紘夜様っ、紘夜様！」

静音がバスルームのドアを叩き、慌てた様に大声で呼ぶので驚いた。

めずらしいな。静音が慌てたり大声で呼ぶとは.....

「どうした？ 静音」

ドア越しに、俺は尋ねた。

「客、は風呂中だとばかり思っていたから——...

「お客様がっ、窓から出て行かれました！」

「は？」

すぐに状況が飲み込めなかった。

一が、

「紘夜さまっ、ここは三階です！」

静音のその言葉で、チ、と舌打ちし、タオルを投げ捨てる。

そして、バスルームの鍵を回し、ドアを開けた。

ヒュオオオオー

冷たい雨と共に、強い風が吹き抜ける。

こっ、怖い！

バスルームの窓から、なんとか隣の部屋のバルコニーの柵に辿り着いた。

が、まだ私がいる所は、柵の外側。

柵を乗り越えれば、隣の部屋のバルコニーに入れるが、それではまた屋敷に、あの男に捕まってしまう。

かといって、ここから庭に逃げるには、

やはり高かった……

私には飛び降りられる距離じゃない。

と、色々考えているうちに、冷たい雨と風で手はかじかみ、怖さと緊張で、もう柵を乗り越える体力さえ残っていなかった。

でも、

でもでも！

ここで挫けるワケにはいかない！

ズドンって川に浮かぶのも、

愛人もイヤ！

あの男に捕まるのにくらべたら、こんなのなんて事ない。

考えただけで血の気が引く。

と、その瞬間、

ガクッ

「ひゃっ…」

雨で足元が滑り、体勢が崩れた。

もうダメ！

血の気が引き、グラリと視界が揺れた、その時、

グイッ、

力強い腕が私の身体を引き上げた。

「一っかやろ！何やってんだっ」  
近くで、怒鳴る声がして見上げると、  
あの男が、バルコニーの柵の内側から、私の身体を引き上げてくれていた。  
「ったく、怖さを知らないのが、一番怖いな」  
私の耳元で呟く、低い声。  
目の前には、男の広い胸。  
襟元の釦が幾つか外れ、鎖骨が見える。

今、私がしがみついているのは、バルコニーの柵じゃない。  
男の、人の胸の中だと気付くと、一気に、気が抜けた。  
そして、震えが止まらなかった。

男は一度だけ、  
ぎゅっ、と強く抱きしめてくれた。

もう、大丈夫。  
そう、言っているかの様に――……

◇

バンッ

力強くバルコニーと部屋を区切る立派な窓を蹴り開けると、男は私を抱えベッドに向かう。そして、

ドサッと、私をベッドに放り投げた。

「ずいぶんと楽しませてくれる女だな」

呆れた様に、男は呟く。

「死にたいのか？ あんな事して」

溜め息と共に零れる言葉。

「し、死にたくないしっ、愛人もイヤだからっ、逃げようとしたんじゃない！」

まだ微かに震える声で、私は反論する。

「愛人？」

不思議そうな表情をした後、何かに気付いたかの様に男はフッ、と笑った。

そして、ベッドに放り投げた私に、近付いて来る。

「こっ、来ないで！」

逃げ出したいけど、男の漆黒の目が私を捕え、動けない。

それが怖さからなのか、

それとも、

その男の黒い目に惹かれたからなのかは、分からない。

男はベッドに腰掛けると、私に顔を近づけて、

「そんなに嫌か？ 俺の女になれば、何でも手に入るぞ」

耳元で囁く。

オトコの低く艶っぽい声に、思わず身体がビクッと震えた。

それは、怖さからでも寒さからでもないことは、分かった。

でも、

ここで挫けるワケにはいかない！

そう思い、手元のシーツをぎゅっ、と握りしめ、

「.....何でも手に入るなんて、いらぬものが増えるだけじゃない？」

私は、キッと目線をあげた。

男は、私の目の前で少し驚いた様な表情になる。そして急に、

はははっ

と、笑い出した。

「なるほど。...そうだな」

そう言って、優しい笑顔を私に向けた。今までとは違う雰囲気、私は戸惑う。

なに？

なんでそんなに優しい笑顔になるの？

男の次々と分からない行動と仕草に、私の頭は真っ白になる。

でも、ここに連れられて来た時とは違う感じがした。

いつの間にか、

震えは止まっていた。

「とにかく、風呂に入れ」

男は黒の紙箱から珍しい黒い煙草を一本取り出し、くわえた。遠目にも独特のパッケージ。

黒地の箱に【BLACK DEVIL】と金色で印字されてる。

こんな状況なのに、似合い過ぎ、などと思ってしまった。

いやいや、そうじゃなかった。。。

「な...なんで、お風呂入らなきゃいけないのよ!？」

震えは止まったが、警戒を解いたワケじゃない。睨む様に、私は男に目を向ける。

「風邪引くだろ、濡れたままじゃ」

鈍色のライターをポケットから取り出しながら、男がサラリという。

え？ 風邪？

なに.....？ 心配してくれて...？

そういうこと？

そういうことなの？

なんだ.....と、気が緩んだ瞬間、

「一週間後に、俺が出席するパーティーがある。それに俺と出席すれば、身の安全は保証する」

煙草の煙と共に男の口から出た言葉に、私は再び頭が真っ白になった。

え？

何をいつているの？ この男――...



煙草から煙る甘い匂いが、辺りに舞う。

頭がクラリとするのは、そのせい？

男の言葉の意味が、よく分からないんだけど……

「もちろん、その日までこの家にいてもらう」

「なに…それ…」

やっと、言葉が出た。

「女性同伴じゃないと周りがうるさくてな。いい縁談があるとか何とか……」

「ちょっ、ちょっと待って！ なにそれ？ 何なの急に――…」

「いや、つい先日、長い巻き髪の女と出席すると言ってしまったな。どうしようかと思ってたら、ちょうどお前、長い巻き髪だな、と」

――は？

「……じゃあなに？ あなたの`でまかせ、のために、私連れてこられたの？」

「ああ」

ひどく短い答え。

わなわなと、握りしめた手が震える。これは怖さとか寒さのせいじゃない！

私は初めて怒りでも震える事を、知った。

「ひどいっ！ これって、拉致監禁よ！？ 今すぐ帰してっ」

「それは困る。巻き髪の女がいなくなる」

「知り合いの髪の長い女に、髪巻いて来てもらいなさいよ!!」

「今から頼むの面倒」

な…っ

なっ……

震える拳を必死に抑え、怒りが頂点に達する直前、

「一週間帰らないか、一生帰らないか、好きな方を選べ」

男が私の耳元で、低く囁いた。

な…

な……っ！

選びようがないじゃないッ！

私は、

むなしく心で、叫んだ。



「大丈夫でしょうか？ 紘夜様...」

「なにが？」

「.....バスルームから、もの凄い物音がしていますが.....」

「一ああ、行き場の無い怒りをブツけてるんだろう」

クククッ、と楽しそうに、紘夜様は笑った。

紘夜様はなんだか楽しそうだけれど、大丈夫だろうか？ お客様がバスルームに入られてから、なんだか、水音とか物音が凄いなー

「静音、彼女の制服をクリーニングに出しておいてくれ」

「あ、はい」

私が答え、紘夜様を見ると、

あの `お客様、の鞆を開け、何かを探しているようだった。

「紘夜様、勝手にそのようなことは.....」

「ん？ 大丈夫、バレない様にやるさ」

いえいえ、そうではなくー...

私の心の中での静止も届かず、紘夜様は鞆の中を堂々と取り出す。そして、その鞆の中から小さな手帖を手にとると、部屋の電話に手を伸ばした。

「紘夜様？」

分からず、問う。

だが、紘夜様は答えず、白い電話の受話器を耳に当てると、

大丈夫、とでも言う様に、軽く笑った。

「.....達花実織（たちばなみおり）さんのお宅でしょうか？ わたくし、真影（みかげ）と申します。実は、お宅の実織さんが私の自宅前で体調を崩しまして.....ああ、いえ、今はお医者様に診ていただき、眠っております。しばらく安静にしていれば大丈夫との事です。.....はい。

...ええ、安心してください。実織さんが目を覚ましたら、またお電話致しますのでー」

ーとまあ、こんな風に、

紘夜様は実織様のお宅に連絡し、電話でお話しした実織様のお母様に、一週間実織様をお預かりする事をお伝えして、承諾を得た。

それはもう、見事な話術で.....

「...これでよし、と」

電話を切ると、紘夜様は手帖を鞆に戻す。

そして、取り出していた荷物を、それはもう見事に元に戻した。

「紘夜様、実織様をいかがなさるおつもりで？」

「.....一週間後の`本家、のパーティーに俺の連れとして出してもらう」

「え？ `本家、のパーティーにですか？」

「ああ。そうでもしないと周りがうるさくてな。縁談だの何だの。まあ `本家、の連中にとっては、どうでもいい事かもしれないが.....」

紘夜様は二十六歳。

確かに縁談の話は多い様だ。

だが `本家、の言葉が出ると、紘夜様の表情は曇る。 `本家、との関係を考えると、仕方がない事かもしれないが、紘夜様の事が心配になってしまう。

「そんな顔をするな、静音。俺は大丈夫だ」

紘夜様に心情を見抜かれ、さとされてしまう。

そんなに、顔に出ていたのだろうか？

こんな事ではダメだと、身を引き締める。紘夜様に仕えるものとして、しっかりしなくては。

「そこで、静音。彼女の世話はお前に任せる」

「私に、ですか？」

「ああ、一週間後までに立派な女に仕上げてください」

「今でも十分に魅力的な、綺麗な方だと思いますが」

先程バスルームで会った時、

雨で濡れてはいたけれど、長く綺麗な黒髪はゆるくカールし、黒目がちな眼が可愛らしい素敵な方だった。

「ああ...まあ、見た目はまあまあかもしれないが、中身がな.....。一週間後までに人前に出せる程度のたしなみは身につけさせてくれ。パーティーでバルコニーから逃げ出されたりしたら、敵わないからな」

紘夜様のその言葉を聞いて、可笑しくなる。

「ふふっ、まあまあだなんて、かなり好みのかたですよ？」

「静音、余計な詮索はいいから、彼女の部屋の準備と支度を頼んだぞ」

実織様の鞆を片付け終わると、白いソファの上に、ボンと鞆を投げ置いた。

そして、ご自分のまだ濡れたままの髪を拭きながら、この部屋を出て行った。

冷たいようで、お優しい紘夜様。

私は、貴方様にお仕えできて、

幸せです。

どこまでも、  
どこまでも、続く闇。

走っても、走っても、前に進まない。

ううん、  
今自分が前に向かって走っているのか、  
どこをどう走っているのかさえわからない。

暗くて、

深い、

怖いほどなんの音もしない、  
静かな、  
静かな闇を、走っていた。

疲れて、もう休んでしまいたいけど、  
ここで休むのは怖くて、  
怖いほどの孤独で、  
押しつぶされそうで、

泣きながら、走り続けた。

「おはようございます。実織様」

差し込む明るい光と、穏やかで聞き覚えのある声で、目が覚めた。

あれ？

——夢？

そんな事を思いながら寝ぼけて、ぼー、としていると、目の前にメイドさんが現れた。

「へ？メイド...さん？」

今イチ状況がつかめない、私。

「はい、静音と申します。実織様のお世話をさせていただく事になりました。よろしくお願い致します」

「は、あ？こちらこそ.....」

ベッドに横になったまま、受け答えしているうちに、

思い出した！

昨日の出来事を——！

「そうだ！私、昨日あの黒い男に連れられて——...！」

ガバッ

と、ベッドから思い切り起き出した。

眠気が一気に吹き飛ぶ。

「ごめんなさいっ！私上手くここから抜け出せなくて、助けを呼びに行けなかった」

目の前のメイドさん、静音さんに私は謝る。

すると、静音さんは目を丸くした後、

ふふっ、と綺麗な笑い声をあげて、

「すみません。昨日は悪ふざけが過ぎました」

「え？」

「私は、紘夜様に捕われ、連れられて来た愛人ではありません。こちらに長い事お仕えしている、普通のメイドでございます」

え？

愛人じゃない？

私みたいに連れ去られて来た訳じゃないの？

「昨日は、あまりに実織様が可愛らしくて、ついふざけてしまいました。お許してください」

「じゃ、じゃあ.....愛人とか、遊ばれてズドンとやられて、川に浮かぶとかは...」

「こちらのお屋敷は、立派な家系です。ここの主、紘夜様もきちんとした由緒正しき家柄のご子

息でございます。何の心配もありません」

じゃあ...じゃあ私が見た、  
あの紅い光景は？  
あの男は、  
俺が殺ったと言っていた.....。

あれは、  
あれは夢じゃない。

だって、覚えてる。  
掴まれた肩の痛みも、  
目の前にひろがる紅い光景も、  
雨の冷たさも、  
全部覚えてる。

あの紘夜という男の黒い姿、  
捕えて離さない眼、  
力強い腕、  
全部.....。

でも、由緒正しき家柄の息子？  
でも、人を殺したの？

なんだか、ワケが分からなくて、思考回路がグルグル回った。

「とにかく、なんの心配もなさらず、実織様は来週に末行われるパーティーの準備を私と共に致  
しましょう」

そうだった！

昨日、そんなことを言われた。

一週間後に行われるパーティーに、あの男と出席しろと――

そして、

一週間帰らないか一生帰らないか選べ、と言われて、

私は、一週間の方を選んだ。

不本意ながら。

思い出すだけで、怒りが込み上げてくる。

あの後も、

俺の部屋で寝るか、この客室で寝るか、好きな方を選べ』

といわれ、やたらゴージャスな客室で寝て、

『制服はクリーニングに出した。裸でいるか、この用意した服を着るか、好きな方を選べ』

といわれ、やたら可愛いワンピースを着て……

これじゃあまるで、招待客じゃない！

っていうか、あの男、二択好き！？

なんか、全てあの男の思惑にハマっているような気がする。

勝手に連れて来られて思惑にハマって、

それって、

面白くない！



「足りないものがありましたら、おっしゃってください。実織様」  
私に綺麗な微笑みを向けて、静音さんはお辞儀をする。

「あの、その実織様、っていうのはやめて欲しいです。そう言う人じゃないし。実織でいいです」

「そう言う訳にはまいりません。実織様は紘夜様のお客様ですから」

「や、お客じゃないと思いますよ。担がれて、ここに連れてこられたし」

「紘夜様は、実織様の身を心配なさってたのですよ。雨に濡れた実織様が風邪をひかぬ様にバスルームにお連れし、ご家族が心配なされない様、実織様のご家族に電話で連絡もなさいました」

えっ！

「家族に、って、私の？」

「ええ、もちろん。そのお電話で一週間実織様をお預かりする事も、ご家族に承諾を得ました」

な、...なんと...

「電話っ、電話貸して、静音さん！」

そうだ！ 誰か、ジュン兄にでも迎えに来てもらえばいいんだ。

そうだ、そうしよう！

「...申し訳ありませんが、それは出来ません。今このお屋敷には、紘夜様のお部屋にしか電話はありません。昨夜のうちに、紘夜様が他の部屋の電話は外してしまいました」

な、...そんな.....

あー.....、携帯はあの時落としちゃったし...

打つ手がない....。

「一週間、一週間だけ紘夜さまのために、お時間を下さい。実織様」と、深々と頭を下げ、お願いをする、静音さん。

「や、やだ、頭あげて下さい」

静音さんの行動に、私は慌てた。

ここまで静音さんにされちゃうと、困ってしまう。

それに、  
ここまで思われる紘夜、というあの男、  
一体――……

少しだけ、  
少しだけ、紘夜という男に、興味がわいた。  
昨日の怖さとか、震えを、忘れた訳ではないけれど……

「……しかたない、か。一週間だけ。家族にも連絡してくれた様だし…」

「実織様…」

「ま、あの男のでまかせ通り、髪がカールしてた事を不運と思うしかないか、」

「髪、ですか？」

「そ、あの男、パーティーに巻き髪の女を連れて行く、って言っちゃったんだって。で、たまたま通りかかった私が連れてこられたの」

まあ、そこまで色々あったんだけど、それを静音さんが知っているのか知らないのか、分からなかった。

だから、私は黙っていた。

◇

「えっ！ なにこの服！」

静音さんに渡された服を見て、私は固まった。

「実織様に着ていただくために用意したのですが、なにか不都合でも？」

「不都合もなにも、これ、普通に着ないでしょ!？」

私は渡された服を、静音さんの前でヒラヒラさせた。

淡い桜色に真珠のような飾りのついた、ドレスを。

「実織様にお似合いだと思いますが、このお色お嫌いですか？」

「いやいや、色じゃなくて。こういう服じゃなくて普通のがいいんだけど？ Tシャツにジーンズとか」

「実織様。実織様は一週間後、紘夜様とご一緒にパーティーに出席されるんですよね？」

「はあ、まあ、そういう事になってるけど？」

「それまで、実織様にはパーティー用のドレスで過ごしていただき、淑女としてのたしなみを身につけていただきます」

しゅ、淑女——っ!？

私は思わず心の中で叫び、後ずさりした。

「淑女としてのたしなみ、パーティーでの礼儀作法、いずれも普段の生活から…。ドレスを着てお過ごしになれば、自然と立ち振る舞いが優雅になります」

「そ、そういうものでしょうか？」

「そういうものです。さ、お着替え下さい。朝食の準備が整っておりますので」

「えっ、え？ ホントに着るの？ ええーっ…」

私の抵抗も空しく、静音さんに桜色のドレスを着せられ、ご丁寧に髪まで綺麗に結い上げてくれた。

「一やっぱり、とてもお似合いですよ、実織様」

「は、あ…」

着慣れないドレスは、とにかく自分が自分じゃないような、そんな気分。

違う世界に迷い込んだみたい。

実際、こんな大きなお屋敷でメイドさんにドレスを着せられてる私は、いつもの私じゃない。

お嬢様、いや、お姫様にでもなった気分。

ガラじゃないけど.....

確かに、さっきの静音さんの言葉通り少しはドレス効果があるみたい。

「さ、朝食に致しましょう。紘夜様がお待ちですよ」  
静音さんのその言葉で、一気に現実に戻された。

え！あの男に、この姿見られるの！？

「い、イヤ...！ご飯ここで食べさせてッ」  
「どうしたのです？一緒に参りましょう、実織様」  
「あの男にこの姿見られるのはイヤ！絶対笑われる!!」  
「そんなことはございません。実織様」  
と、私と静音さんが言い合っていると、  
バンッ  
部屋の扉が勢いよく開けられ、あの男が、部屋の入り口に立っていた。

「遅い！いつまで待たせる気だ！」  
「なっ！とっ、突然現れないでよ！ビックリするじゃないっ」  
私は静音さんの体に隠れる様にしながらも、大声で叫んだ。

ここで負けてられるか！

「って、なに、静音に隠れながら叫んでんだよ？」  
うっ.....  
だって...  
「俺は腹へってんだ、さっさと飯にするぞ」  
「紘夜様、またそのような事を。実織様を、お食事の場までエスコートして差し上げて下さい」  
ひー！  
静音さんっ、なんて事を！！

部屋を出て行こうとしたあの男は、静音さんの言葉に、はあー、とため息。  
そして、私の方に向かって歩いて来た。

「い、嫌々あんたに連れて行ってもらわなくてもいいわよっ」

「紘夜」

「え？」

なに？ 紘、夜...？

「あんたじゃなくて、俺は紘夜だ。実織」

そう言って、私に手を差し伸べた。

「な、なに勝手に、私の名呼び捨てにしてるのよ！」

「なら、お前も、俺の名を呼び捨てにすればいいだろ」

「そう言う問題じゃー...」

「あー、もう、うるさい。ほら行くぞ」

と、その瞬間、

私の体は、ふわりと浮いた。

あの日、ここに連れてこられたときの様に、肩に荷物でも抱えるかの様に、

紘夜は私を抱えた。

「ちょっ、ちょっと！ こういう場合、抱え方が違うんじゃないの!？」

私の目の前、広い背中に向かって、叫ぶ。

頭に血が上るし、これじゃ、色気も何もない。

それに、紘夜の顔の横に私のお尻があるって、

どうなの!？

これはこれで、恥ずかしいんだけどっ！

「なんだ、お姫様だっこでもしてほしかったか？」

「なっ！ 誰がそんな事っー...」

紘夜は、何が可笑しいのか、食事の部屋に着くまで、くくっ、と笑っていた。

っていうか、

最初からこれじゃあ、淑女も何もないんですけど.....。

桜色のドレスが、きっと泣いてるわ。

とんでもない女に着られてしまった、ってー。

紘夜に担がれる私。

私を担ぎ、ドンドン長い廊下を歩く紘夜。

顔をあげると、

静音さんが遠く、段々と、遠くに見える。

まるで、微笑ましい様子を見る様に、静音さんは綺麗に微笑んでいた。

その優しい笑顔に、私は抵抗する声を失い、

大人しく、紘夜のグレー色のシャツの背中に、

視線を落とした。

食事の部屋はとても広くて、  
10人ぐらい座って余裕で食事出来る、白い大きなテーブルだった。  
そこに、紘夜と私、二人だけ。

「...ねえ、ここで二人だけで食べるの？」

向かい合う紘夜に、私は尋ねた。  
向かい合ってはいるけど、  
遠い.....。  
豪華なフルコースが並べられる程、私と紘夜の間も距離があった。

「当たり前だ、ここじゃなくて、どこで食うってんだ？」

「だって、こんな広いところに二人だけなんて...。静音さんは？ 静音さんや、他の人達も一緒に食べたら？」

私が、そういうと、紘夜はちょっと驚いたような顔をした。

「.....お前、面白い事言うな」

「え？ 何が？」

「何って、静音や他の者達もここで、なんて」

「それが、面白いの？ 私にはこんな広いところで、二人だけでご飯食べる方が可笑しいけど？」

「そういうものか？」

「だって、もったいないじゃない。こんなに広いのに...、あっ、紘夜の家族は？ 忙しいの？」

私がそう言うと、紘夜は目を細め苦い表情になる。

そして、  
黒いズボンの後ろポケットから、前に見た黒い煙草の紙箱を取り出すと、慣れた手つきで一本煙草をくわえ鈍色のライターで火を点けた。

くゆる煙、  
紘夜の唇から吐き出されると同時に、

「俺に家族はいない。」

え？

「あるのは煩わしい血の繋がりだけだ」

そう、

表情を変える事なく、静かに言った。

「それって、どういう...」

くゆる煙草の煙と、紘夜の言葉で心が落ち着かない。

「俺の詮索はするな。一生帰れなくなるぞ」

そういうと、紘夜は席を立った。

「紘夜っ、どこ行くの!？」

「飯いいや、仕事思い出した」

「ちょ、ちょっと、紘夜！」

私の声に振り向きもせず、

紘夜は、扉の向こうへ行ってしまった。

甘い煙草の匂いだけを残して。

な...に？

どうしたの.....？

紘夜の苦い表情を思い出すと、心がザワついた。

鼓動が、体中に響く。

私——...

嫌な事、言っちゃったんだ—...

紘夜の触れてはいけないところに触れてしまったのだと、

気付いた。



紘夜様が席を立たれてから、  
しばらく、  
実織様は考え込む様に、動かなくなってしまった。

私は紘夜様の席に用意した食事を下げようと、ライ麦パンと胡桃パンをのせたお皿を片付ける手を伸ばすと、

「待って、静音さん」

実織様の声がした。

「いかがなさいました？ 実織様」

「...紘夜、戻ってくるかもしれないでしょう？」

「.....残念ですが、紘夜様は戻られません」

「どうして？」

「煙草を、」

「え？」

「煙草を口にされたからです」

「煙草？」

「紘夜様の煙草は区切りの証です。食事の時間はお終い、このお話はお終い。——そういうことです」

長い間共に過ごして、そう気付いた。

だから、

紘夜様戻られる事もこの食事を口にすることも、ない。

「じゃあ、そのパンとおかず、私に下さい」

「え？」

実織様が二人分食べて下さるといえるのでしょうか？

それはそれで、無駄にならずにすみませんが.....

そんな事を思っていると、実織様は紘夜様の分のお皿を持って、

「キッチン、貸して下さい」

そう告げると、厨房に続く奥の部屋へと入って行く。

「え？ み、実織様？」

さすがに私は慌てて実織様の後を追いかけて、厨房に向かった。

私が厨房に着くと、

実織様はライ麦パンの上に朝食のメニューであったベーコンとスクランブルエッグをのせ、もう一枚のライ麦パンで挟んでいた。

「実織様？ 何を……」

「あ、大丈夫、ちゃんと手は洗ったから」

いえ、そういうことではなくー…

「静音さん、冷蔵庫のもの、もらってもいいですか？」

「え？ あ、はい。どうぞ…」

訳が分からない…。

私が言葉を失っている間、実織様はテキパキと動く。

桜色のドレスの裾を気にする事なくー。

「出来たっ！」

実織様の達成感に溢れた声で、私はハッとなった。

「静音さん、冷蔵庫のクリームチーズとマーマレード少しもらいました」

「は、あ...、それで、実織様は何を？」

「え？ ああ...、紘夜の朝ご飯です」

え？

紘夜様の？

「でも、紘夜様はもう部屋に戻られ、きっとお仕事ですよ？」

「ええ、なので食べやすい様に、サンドイッチにしてみました」

笑顔で、実織様は出来たばかりのサンドイッチを見せてくれた。

ライ麦パンでベーコンとスクランブルエッグを挟んだものと、

胡桃パンに切り込みを入れ、間にクリームチーズとオレンジのマーマレードを挟んだもの。

「紘夜きっと、おなか空いてるだろうから...。あ、勝手に朝ご飯に手を加えて、ごめんなさい」  
申し訳なさそうに私に言うと、実織様は深々と頭を下げた。

「いえ、構いません。...紘夜様のこと考えて下さり、ありがとうございます。実織様」

「え？ いえ別に、紘夜のためとか、そんなんじゃ...ただ.....」

「ただ...？」

「私、紘夜が話したくない事に触れてしまったから.....傷つけて悪かったな、って」

傷.....

そうかも知れない。

紘夜様にとって、`家族、という言葉は封印したもの。

誰もが触れない、

パンドラの箱。

何が出てくるか、分からない。

だから、誰も一、

私でさえも触れる事の出来ないもの。

でも、もしかしたら彼女なら、  
実織様なら、  
その呪縛から、紘夜様を救えるかもしれない。

そんな、予感がした。

すー、はあー、……

私はサンドイッチをのせたお皿を持って、紘夜の部屋の前で深呼吸した。

き、緊張するな……。

なんて言って入ったらいいんだろ…。

静音さんに頼もうと思ったら、

『実織様がお持ちになられた方が、紘夜様はお喜びになられますよ？』

なんて言われて、自分で来てしまったけど、

ホントに喜ぶか？

あのイジワルな男がー…

なんて、考えてたら、

バンッ！

目の前の扉が思い切り開かれて、

「ひゃっ、」

ビクビクして少し後ずさり。。。。

「何なんだお前はっ、さっきから！」

え？

声がして視線を上げると、

目の前には、長身の紘夜が立っていた。

「紘、夜……？ なんて…？」

「俺は人の気配には敏感なんだよっ。さっきからお前の気配が部屋の外でして、鬱陶しいっらない！」

う、鬱陶しいって……

「ヒドい！そんな言い方しなくてもいいじゃないっ」

「本当のことを言っただけだ。そわそわした気配が気になって、仕事にならん！用があるならさっさとしろ、さっさと！」

むかつ

「分かったっ、仕事の邪魔して悪かったわね！ これでも食べて、さっさと仕事したら!？」  
紘夜にえいっ、とサンドイッチのお皿を渡し、私は踵を返して廊下を走り出した。

「あ、おいっ、なんだよ？ これっ...」  
戸惑う紘夜の声が聞こえたけど、聞こえない振りをした。

――ああ、謝りそびれた.....

そんな事を思いながら、私は廊下を走り続けた。

◇

はあ――...  
溜め息ばかり出てしまう。

また怒鳴り合いで終わっちゃった.....。  
サンドイッチも押し付けて走り去っちゃったし。。。  
おかしいなあー、こんなはずじゃなかったのに...

「どうされたんですか？ 実織様」

用意された部屋で私が机に突っ伏していると、  
静音さんの柔らかい声が聞こえて来た。

「.....ちょっと、自己嫌悪中」  
「なぜです？」  
「...また紘夜と怒鳴り合いしたから、」  
「怒鳴り合い...？ 紘夜様とですか？」  
「そう」  
「...凄いですね、実織様は」

え？ スゴい？  
ーって、何が？

「実織様は紘夜様が怖くはないのですか？」

怖い...？

「そ、っか...、私、紘夜に連れてこられたんだっけ」

思い出す。

昨日の、雨の夜を。

紅く染まった、水溜まり。

黒く服の男達。

紘夜の車に乗った事。

そういえば、あの時も、紘夜は煙草を吸っていた。

めずらしい、甘い匂いがした。

「紘夜様と怒鳴り合う事が出来るのは、実織様くらいですよ、きっと」

「うーん、馴れてるから、かな」

「馴れてる？」

「そう、ジュン兄...、あっ、私のお兄ちゃんがね、よく私のコト怒鳴るんだ、これが。ゝトロいゝとかゝ危なっかしいゝとか、それはもう毎日の様に」

「実織様の事を心配してらっしゃるんですね」

心配.....してるかな？

今も一一...

「ねえ静音さん、紘夜がウチに電話してくれたって言ってたよね？ 誰が出たか分かる？」

「はい。実織様のお母様です」

あー...、やっぱり。

ジュン兄だったら『人様に迷惑掛けんじゃない！』

って、連れにくるもんな、きっと。

でも、

その怒鳴り声が、今は欲しい.....

「帰りたいな...」

ポツリと、出た言葉。

ハツとした様に静音さんが私を見る。

きっと、今頃はみんな学校で、  
数学の公式に悩まされたり、  
英語の単語憶えるのに必死になっていたり、  
最近の体育はマラソンで、私は大嫌いだったけど、

今はそれさえも懐かしくて、  
涙が出そうだった。



「大丈夫ですよ。一週間後には帰れます」

「.....ホントに？」

「ええ、紘夜様は約束を達えるような方ではありません」

「...信じてるんですね、紘夜のこと」

私は顔を上げ、真っすぐ、静音さんを見る。

「はい。信じております。紘夜様は立派なお方ですから」

真っすぐに、綺麗な目で静音さんは私を見る。

立派.....。

でも、

人を殺したかもしれないんだよ？

その言葉を、私は飲み込んだ。

「立派、か...。ね、どんな風に立派なんですか？ 紘夜って」

私は、あまり期待もせず、聞いてみた。

すると、

静音さんの目が輝いた。（ような気がした）

「この真影家は、元は華族の血を継ぐお家柄。紘夜様は真影家のご子息で、お兄様とお姉様がいらっしゃいますが、紘夜様がお父様の事業を引き継ぎ、周りの信頼も厚く尊敬出来るお方でございます」

へ、へえー、

それは確かにスゴい家柄。

周りの信頼も厚く尊敬出来るお方、って所は引っかかるけど.....。

「それで、その家族は？ このお屋敷で見かけないけど...」

「それは.....」

「静音！余計な事は話す必要はない」

声に驚いて振り返ると、扉のところに紘夜が立っていた。

び、びっくりした...  
全然気付かなかった...

「そいつには、パーティーまでに覚えてもらう事があるだろ。さっさとしろ」  
相変らずな態度で、紘夜は部屋に入って来た。

「申し訳ありません。おしゃべりが過ぎました」  
「静音さんは悪くない。私が話してって頼んだの！」  
「聞いてどうする、お前には関係ない事だ」  
「そっ...」  
そうだけど.....  
なんか、気になったから。  
紘夜の事が.....

それがどうしてなのかは、よく分からないけど――

「さっきの飯はお前が作ったのか？」  
「え？」  
突然、話を振られて驚く。

「飯、って、サンドイッチの事？それなら私だけど.....」  
また怒鳴られるかと、ちょっと身構えた。  
けど、

「うまかった」  
さらりと、紘夜が言った。

「え？」  
思ってもない言葉に、私はきょとん、となった。

うまかった？  
今、そう言った？  
紘夜が？

「なんだ？」  
私の、穴があく程の視線に応えるように、紘夜が私を見る。

「ビックリ、した…。紘夜って、可愛いところあるんだ…」

「なっ、バカにしてんのか!? お前！」

あはははっ

思い切り私が笑うと、

紘夜が、私の頭をくしゃくしゃと乱暴に撫でる。

私は、せっかく静音さんに結い上げてもらった髪を守ろうと逃げる。

でも、

紘夜に腕を掴まれ引き寄せられた。

そして、

「その桜色、似合うな」

私の耳元で、紘夜がそう囁いた。

きっと、

私の顔は今まで見た事もない程に、真っ赤になっていたと思う。

思いがけない言葉。

思いがけない行動。

紘夜は驚く事ばかりで、気になってしまう。

でも、

忘れた訳じゃない。

あの雨の夜を――…

『ああ、オレが殺った』

ねえ、紘夜、

ホントに、あなたがやったの……？

わからなくなる。

ここで、こうしていると。

何が本当なのか、

何を信じればいいのか、わからない。

わからないよ、紘夜。

あなたは、

いい人？

悪い人？

優しい人？

冷たい人？

あなたは、

ダレ？

あの雨から五日。

毎日テーブルマナーや招待客リストなるものを覚えさせられ、その分、数学の公式も英単語もどこかへ飛んでいくようだった。

でも、あれから毎日ウチへ電話させてもらえた。

この時だけ、紘夜の隣の部屋に子機を持ってきてくれて。

ただし、紘夜の目の前で、だけだけど。

今日も夜になりウチに電話すると、よりもよって出たのがジュン兄だった。

「――だから、あと二日、明後日には帰れるから」

『なんだそりゃ、なんで明後日なんだよ？』

「んー、お医者さんがそう言ったの！ 明後日までは動かない方がいいって」

『だから、迎えいくって』

「ダメ！ あっ、いやいや大丈夫、大丈夫だから、」

『あやしい……実織、お前なんか隠してんだろ？』

「か、隠してないよ、何も……」

その時、

視界の端から、紘夜の姿が消えた。

あれ？ どこ行くの？

いつもは、電話が終わるまで動かないのに……？

私は気になって、電話の子機を持ったまま紘夜の後を追った。

廊下に出たところで、紘夜は煙草に火を点け黒いコートを羽織った。

「どこ行くの？」

思わず、紘夜にそう尋ねる。

紘夜は振り返ったけど、何も応えずに電話を続ける、と合図した。

『どこにも行かねえよ、何言ってんの？ お前』

ジュン兄のバカにしたような声が聞こえた。

違うよ、ジュン兄の事じゃないって。

『こんな雨の中、夜になってまで出たくねえよ』

「雨？」

言われて、窓の外を見る。

微かな音を立てて、雨が降っていた。

雨……。

思い出す、あの日の事。

黒いコートを着て、黒い煙草をくわえた紘夜の姿。

――あっ、

「ごめん！ ジュン兄、また電話するからっ」

『あ、おいっ、実織――』

ジュン兄の声を聞く前に電話を切り、私は紘夜を追った。

はあ、はあ、はあ、

い、息が切れる……。

でも長い廊下を走り、階段を駆け下りて一気に玄関に向かう。でも、大きくて重厚な玄関扉を開けた時には、もう紘夜の車が遠くに見えた。

静かに降りしきる雨の中、なんとなく嫌な予感がして、私はしばらくその場から動けなかった。

◇

静かに降り続けていた雨は、0時を過ぎた頃には激しい音を立てて降る様になっていた。

紘夜はまだ帰ってこない。

静音さんは二十二時を過ぎた頃、敷地内にある使用人用の寮に帰っていった。紘夜が夜遅く出歩くのはめずらしい事ではないと言われ、他のお屋敷で働く人達も気にしてないようだった。

でも、なんかへんだよ。

夜遅く雨の中出たきり何の連絡もなく、まだ帰ってこないのに、心配じゃないの？

家族なら、

心配するでしょう？

紘夜の家族は心配じゃないの？

『家族はいない。あるのは煩わしい血の繋がりだけだ』

思い出す、紘夜の言葉。

ねえ、どういう意味？

眠れない夜、私は窓際の椅子に座ったまま、

ただ、降り続く雨を眺めて過ごした。

ガタンッ

物音でハッとなった。

どうやら、いつのまにか寝てしまったみたい。窓際の椅子で膝を抱えたまま……。

今の物音は？

そう思って、窓を開けた。外は、相変わらず降り続く雨。

そして、外に中途半端に止められた黒い車が視界に入る。

その傍に、雨に晒されたまま車に寄り掛かる、

紘夜が、いた。

「紘夜！」

雨の中、私は飛び出した。

近づくと、紘夜は左腕を押さえ、グッタリしていた。

「紘夜！ どうしたの！？」

「……実織？ ……お前、こんなところでなにやってる？」

「それはこっちのセリフ——…ッ！？」

言い終わらないうちに気付く、

紘夜の左腕と脚の辺りから、紅く流れるもの——……

これは、血……！？

「ケガしてるの？ 誰か呼んでくるっ——」

「いい！ 誰にも言うなッ」

立ち上がる私の腕を掴み、紘夜が叫ぶ。

「どうして？ だって、ちゃんと手当てしないと——…」

紘夜を振り返った、その時、

紅く染まったシャツと黒いコートの際間に、

鈍く光る銃が、見えた。

「…な、……んで？」

思わず零れる、言葉。

降りしきる雨の中、

紘夜を助け起こす事も、逃げ出す事も出来ずに、



私はただ、立ち尽くしていた。

「いーから、お前は部屋に戻れっ」

そういいながら、紘夜は私を突き放すかの様に顎で屋敷の方を指した。

視線を、合わせようとしめない。

だから、

「戻れたって、こんなケガしてる紘夜を一人置いて、行けるわけないでしょう!？」

視線を合わせようとしめない、紘夜。

だから、

言葉に出来た。

部屋に戻れたの、お前には関係ないだの、

紘夜は文句を言ったが、構わずになんとか玄関から一番近い部屋まで、紘夜を連れて行った。

ベッドに寝かせようとしたら、

「いい、血で汚れる」

と言って、扉の横に座り込んでしまった。壁に寄り掛かり、もう動こうとはしない。

私は溜め息を一つつくと、バスルームから幾つかタオルを持って来た。

「見せて、傷。止血するから」

私が紘夜の黒いコートを脱がせようとする、

「お前、出来るのか？無理すんな」

傷口を押さえていた右手で、私の手を止めた。

その手は紅く染まって、

雨で、冷たくなっていた。

その手を見るだけで瞼が熱くなる。雨とは違うものが零れそうになったけど、私は堪えた。

「.....無理でも何でも、今できるのは私しかない。静音さんには知られたくないんでしょ？」

平気なフリをして、黒いコートを脱がせる。

紘夜はそれ以上何も言わなかった。

コートを脱ぐと、紘夜の白いシャツの左側はどこが傷口か分からない程、

紅く染まっていた。

一瞬、動かしていた手が止まる。

だめ、怖がっちゃ...

今、私しか、いないんだから。

でも.....

「ねえ、こういう傷って、どうすればいいの？」

「...お前、それでよく手当てするなんて言えたな」

「う、うるさいなっ。だって今まで傷なんて、消毒シュシュッとして、絆創膏ペタ、ぐらいしかしたことはないんだもん」

これはさすがに、シュシュッ、ペタの規模じゃないし……

紘夜は、はぁ、と溜め息をつくつと、

「二の腕を刃物で切られた。傷口にタオルあてて肩の近くを強く結んでくれ」

「は、はい！」

って、傷どこ……？

「今、シャツ脱ぐから、それで結んでくれ」

「えッ」

シャツ脱ぐって、

「待って！ なんか着るもの持ってくるから」

「そんな事してたら、出血多量で倒れるぞ」

と言い終わらないうちに、紘夜はコートもシャツも脱ぎはじめた。

「ほら、このシャツで止血であてたタオル縛ってくれ」

「は、はい…」

出来るだけ紘夜の方を見ないように、二の腕の傷口にタオルをあてて、肘の近くと肩の近くをシャツで結んだ。肩のあたりを強く結びながらも、

紘夜が、近くて――

広い肩幅、

引き締まった腕、

な、なんか、手が震える……

「なに？ 俺の体、意識してるわけ？」

ドクン

「そっ、そそそんなワケないでしょ！ なに言ってるのっ」

「顔も耳も真っ赤にして、なに言ってる。お前は」

イジワルな紘夜の声が、耳をくすぐる。

「うっ、うるさいなっ。だいたいこんなケガして、私がいなかったらどうするのよ？」

「こんな時のために知り合いの医者があるんだが、今日は留守だった」

こんな時――…

こんな事が、よくあるってこと？

「……ねえ、紘夜はどうしてこんなケガしたの？ …何をしているの？」

視線を合わせないからこそ、聞いた、言葉。

でも、

「俺の詮索はするな。一生帰れなくなるぞ」

またその言葉を言って、紘夜は煙草を取り出し一本くわえた。

あの【BLACK DEVIL】

ああ……。まただ。

鈍色のライターで火を点けると、甘い薫りが、舞い上がる。

また、この話はお終いの合図。

「後は自分で出来る。お前は部屋に戻れ」

「でも、まだ脚の手当てが――…」

「いいから、戻れ！」

紘夜の怒鳴り声に体がビクッと、なる。

怒鳴り声なんて、ジュン兄で慣れてるはずなのに、

なんだか、紘夜の声が哀しくて、瞼が熱くなった。

私は部屋を飛び出し、廊下を駆け出した。

知らずに涙が溢れる。

気付いて、涙を拭おうとした、

その掌が、

紘夜の血で紅く染まっていた。

震える紅く染まった掌を、

ぎゅっ、と握りしめた。

わかんない、何で震えるの？

怖いから？

驚いたから？

哀しいから？

わかんないよ。

なんで、

こんなに涙が、

溢れるの？

俺らしくもない。

「落ち着け…」

紫煙を吐きながら自分に言い聞かせる様に呟く。

なぜだ？

どうして俺は、こんなにイラついている？

よくわからない感情が、俺をイラつかせる。

あいつが、

実織が触れた腕が、熱い。傷の痛みとは違う熱が、俺にまとわりつく。

今日、

あの雨の日に実織を見つけたヤツらを、

始末した。

それだけでも俺らしくない行動なのに、

あんな物まで探しに行ってしまった。

思い出す。

俺の黒い車の中にある、

紅い傘と鮮やかなピンクの携帯電話。

実織が、

紅い傘とピンクの携帯をあの時に落としたと、話した事があった。

そんな話を、

憶えているなんて——

そんな物を、

探しに行くなんて——

自分の行動が、

自分の言動が、

なぜかいつもと違う。

なぜ——？

なんなんだ？

なんなんだ、あの実織というオンナは――。  
こんな自分は知らない。

よく分からない感情が俺を動かす。  
今まで出会った女とは、  
何かが違う。  
実織は、  
予測不能な行動ばかりする。  
着飾った姿を見せたがらない。  
疑問はどんどんぶつけてくる。  
俺と言い争いになることを恐れない。

血まみれの俺の手当てを、  
泣きそうになりながら、震えながらする。

絃夜、と  
俺を呼ぶ実織の声  
離れない。



気づくと、  
部屋の中を朝日が照らし出していた。  
いつのまにかそのまま壁際で寝てしまったようだ。  
血だらけのまま……

まずいな。  
静音がくる前に着替えなくては。

体は昨夜より動く。  
俺は左腕の傷口を無事な右手と口を使って、包帯でキツく巻いた。  
脚の傷は血が止まっていたが、また傷口が開かないよう包帯で巻く。左腕は痛むが歩くことはできる。  
不器用ながら実織のおかげだなと考えると、

よぎる、実織の声。

消し去るように、

俺は洗面所の蛇口を思い切り開き、頭から水をかぶった。

びしょ濡れの頭をタオルでガシガシ拭きながら、俺は血だらけの服を新聞紙に包み、クローゼットの奥に押し込んだ。

今度、いつもの医者のところに行った時にでも、処分してもらうか。

あいつなら、

吉水(ヨシミズ)なら慣れてるからな。

『またか』

とグチの一つも言われそうだが、俺もそれはもう慣れた。

着替えが終わる頃には昼近くになり、何度か静音が来たが、仕事中と告げドアを開けなかった。

実織は、一度も来なかった。

気付くと、実織を気にしている自分。  
滑稽だな。突き放したのは、自分なのに――

なぜかイラついた。よくわからない感情に。

「……なんなんだ、一体…」

俺は机の上から【BLACK DEVIL】の紙箱を手に取り、同じ黒に金色のラインが入った煙草を一本口にくわえると、鈍色のライターで火を点けた。

ジジ、と燃え、紅く火がともる。

甘い匂いが、辺りを包む。

深く吸い込み、

一つ、大きな溜め息とともに煙が舞い上がった。

窓際の壁に寄り掛かり、その煙りの行方をぼんやり眺めていると、

ふと、視界の端に窓の外が映る。

そこには、眩しい程の笑顔があった。

思わず、自分の眼を疑う。

だが、そこには確かに眩しい笑顔と笑い声に溢れていた。

窓の外、庭で静音と何やら楽しそうにしている、

実織の姿があった。

白いドレスを身にまとい、庭に咲く彩り豊かなの花の中を楽しそうに走る、実織の姿。

その後ろでは、静音が何かいいながら実織のあとを追っていた。

ドレスがひるがえるのも、

結い上げた髪が風になびくのも気にせず、

実織は後ろを追う静音を時々振り返りながら、走っていた。

零れる、笑顔。

溢れる、笑い声。

驚く程、実織は生き生きとしていた。

昨夜は震え、

泣きそうだったのに――……。

怒ったり、

赤くなったり、

沈んでいたり、

くるくると表情が変わっていく実織。

――ああ、そうか、  
くるくるとよく変わるから、実織は生き生きしているのか……。

沈んだり怒ったりするから、笑えるのだ。  
あんな風に――。  
怒りたい時に、思い切り怒って、  
照れた時は、赤くなって、  
沈んだ時は、机に突っ伏して、  
怖い時は、泣いて。

だから、  
嬉しい時、楽しい時は、思い切り笑える。  
心から、笑い声ともに笑顔が溢れる。

今まで俺とは無縁のものが、今はすぐ近くに、  
こんなにも近くに、溢れていた。

そして、窓に映った自分の表情に俺は驚いた。  
さっきまでは滑稽だと情けない表情だった俺が、今、窓に映る俺の表情はほころんでいた。

どういうことだ？  
なぜ――？  
思わず、掌を自分の顔に持っていくと、  
「あつ！」  
くわえていた煙草の火が掌に軽くあたり、掌をブン、と振る――  
ガン、  
「って！」  
今度は、机の角に手の甲をぶつけた……。

「…ぶ、くっ、くくく……」  
火で少し赤くなった掌と、角にぶつけて赤くなった手の甲を見て、  
俺は思わず笑ってしまった。  
今までとは違う、情けない笑いじゃない。  
何がおかしいのかよく分からなかったが、  
なんだかおかしくて、  
一人で窓の外と自分の掌を見て、俺は笑った。





「み、実織様、そんなに走られてはドレスが汚れてしまいます」

前を走る実織様を追って私がそう言うと、  
結い上げた髪の後れ毛がふわりと舞い、可愛らしい実織様の表情が、  
しまった！ といった表情に変わった。

「あっ！ そうだった！」

実織様は慌てて白いドレスの裾を上げ、くるりと回りドレスの様子を見回した。  
一目瞭然、白いドレスにはいつのまにか緑の葉や黄色の花粉、彩り豊かな花びらが幾つか咲いていた。

「ふふ、本当の花のドレスのようですね」

実織様の可愛らしさに、思わず笑いが零れる。

けれど、しまった、と表情を引き締めた。

「すみません、笑ったりして……」

私としたことが――

「え？ どうして静音さんが謝るの？ 謝らなきゃいけないのは私の方ですよ」

ふわり、

ドレスを揺らして実織様が私に近づき、私の顔を覗き込む。

「ごめんなさい。久しぶりに天気がよくて、ついはいしゃいじゃって...ドレス汚してしまいました...」

叱られた子猫のように、実織様は、しゅんとした表情をする。

本当に不思議な方。

楽しそうに笑いながら走り回っていたかと思うと、

途端に、しゅんと落ち込む表情を見せる実織様。

くるくると表情がよく変わる。

それが、不思議に感じた。

このお屋敷の方々は、いつもほとんど表情を変えない。

特に絃夜様は、いつも緊張感を持っているようで、

ピンと空気の張りつめたような方だ。

そういえば、笑ったところなんてほとんど見たことがない。

でも、ここ最近はどこか表情が和らいだように感じる。

ああ...そうか...実織様が現れてからだ。

実織様が現れて、

怒ったり、微笑んだり、

そんな表情をするようになった。

厳しい表情をすることはあったが、今までのそれとはどこか違うように思う。

なんというか……

心が、ある。

今までは機械的にさえ見えたことも、実織様のこととなると怒っていてもどこか、あたたかさを感じた。

そう、そうか……。

「実織様が、冷たく凍り付いていた紘夜様の心を解かしてくれたのですね」

「えっ？」

私の呟いた言葉に、意味が分からないといった表情の実織様が、振り返る。

本当にくるくると表情がよく変わる。

その様子を見ていると、こちらまで表情が和らぐよう――。

「いえ、なんでもありません。実織様がここにいらしてよかったと、そう思ったのです」

「え――？ でも無理矢理連れてこられたんですよ？ 巻き髪ってだけで」

今度は不満そうに、ぶうーと頬を膨らませ、怒ったような表情になる。

でも、そんな表情さえも可愛らしく見えてしまう。

「ふふっ。巻き髪ですか？ …もしかしたら他にも理由があるのかもしれませんが？」

「ええー！ どんな？」

「さあ？ それは紘夜様にしか分かりません」

紘夜様が何の理由もなく、女性の方をこのお屋敷に連れてくるなんてことは考えられない。

お父様の仕事を継ぎ、誰よりも頑張っておられる姿を知っているから……。

例え、

そのお仕事は何なのかは私の知る所ではなくても、

その誠実な姿勢は伝わってくる。

そう、このお屋敷で働くようになってから、

紘夜様を見てきた。

長い年月、ずっと……。

気付くと、

日は傾き、辺りは夕暮れ色に染まっていた。

秋を感じる冷たい風が吹き抜ける。

「実織様、風が冷たくなってきました。お部屋に戻りましょう？」

私の実織様を屋敷に促すと、

「あ！ ちょっと待って、静音さん」

そう言って、庭の片隅の花壇に駆け出す。

「いかがなさいました？」

不思議に思い、実織様のあとを追い尋ねると

「この花、少し摘んでもいいかな？」

私を振り返り、笑顔を向ける実織様。その可愛らしい表情に思わず、

ええ、とうなずいてしまった。

ハッ、

私としたことが――

どうも、私は実織様のどんな表情にも弱いのだと、今更ながら気付いた…。

「でも、そのお花を摘んでどうするのですか？ 実織様のお部屋に飾るのですか？」

「ううん、私のじゃなくて、紘夜の」

「えっ！」

紘夜様の？

「でも…」

紘夜様は、部屋に花を飾らない。

それに、紘夜様の部屋に立ち入ることは許されていない。

誰も――

紘夜様は自分の部屋だけは自分で始末をすると、日々の掃除から片付けまで、ご自分でなさる。

聞いた話では、お父様の事業を継いだ十六歳の頃からその生活が始まったという。

以来、誰も紘夜様の部屋に入った者はいない。

「どうでしょう、静音さん？ 綺麗にできたかな？」

摘んだ花を私に嬉しそうにみせてくれる実織様。

秋桜

撫子

霞草

瑠璃茉莉

白から桜色、淡い紫へと彩られた花束は、とても綺麗だった。

「ええ...とても、綺麗です」

「よかった！これなら紘夜、元気になるかな？お見舞...あ！」

「おみま、あ？」

「うっ、ううん！お、おみ...女郎花も入れた方がいいかな？」

急に口元を抑え、辺りを見回す実織様。

少し不思議に思いながらも、

「そうですね...、白と桜色と淡い紫で綺麗ですので、女郎花の黄色は入れない方がいいのでは？」

私がそう話すと、

「そっ、そうですね。じゃあ、これで完成！」

元の笑顔に戻り、実織様はお屋敷へと歩き出した。

「み、実織様」

段々と早足になる実織様を止めようと、私も後を追う。

今日はきっと、紘夜様の機嫌はよろしくない。

なぜなら、朝から一度も顔を見せては下さらないから.....。

「でね、花を飾りつつ紘夜の弱みを探すの！」

「――は？」

実織様の突然の発案に、私としたことが情けない声を出してしまった。

「あ、あの.....実織様？」

「いつもいつもイジワルで上から目線で、悔しいじゃない！？だから見返してやるのよ！」

振り返り、素敵な笑顔を向ける。

その笑顔に思わず再びうなずいてしまうところを、私はなんとかとどまる。

いえ、あの...

いつの間にそのような考えに？

実織様を止めようと伸ばした掌が、行き場を探し宙で止まる。

ど、どうしたらいいのでしょうか.....。

私が考えを廻らせているうちに、実織様は彩る花束を抱え、屋敷へと走り出した。

しまった、止めなくては！

私は慌ててあとを追った。

紘夜様

こんなに目まぐるしい時間は、今までありませんでした。

こんな時は、どうしたらいいのでしょうか？

申し訳ありません。

私が不勉強なばかりに、実織様についてゆくだけで精一杯の私をお許してください.....

「実織様っ」

やっと紘夜様のお部屋の前で追いつき、部屋の扉の前でしゃがんでいる実織様に声をかけると、  
しいー、

と唇に人指し指をあて、静かにするように私に訴えかける。

訳が分からず、とりあえず近づくと、

「紘夜、今部屋にいないみたい。チャンスだよ！」

可愛らしく片目をつむり、私に合図を送る。

いえいえ、ですから誰も入ってはいけないと――

と告げる前に、

ガチャ

「実織様っ、ダメで――」

声を出した私の口を、扉を開けた実織様の掌が塞いだ。

「ダメだよ静音さん。声だしちゃ」

いえいえ、ダメなのは実織様の方です。

こんな所を紘夜様にみつけたら――

「そうだよな、俺に見つかったら大変だよなあ」

「そうだよ、紘夜に――って、えっ！」

突然頭上から聴こえてきた低い声に、実織様が驚いて顔を上げる。

ああ...作戦失敗です。

実織様.....

「こっ、紘夜！」

「おおーいい度胸だな、実織。俺の部屋に忍び込もうなんて」

少し開いた扉、

部屋の中から覗く紘夜様の表情に、実織様も私も固まった。

ボタン

紘夜様は私達のいる廊下に出てくると、自室の扉を閉めた。

しゃがみ込んでいる実織様と私の前に立ちはだかる、長身の紘夜様。

き、気まずい雰囲気です.....

「し、忍び込もうとしたんじゃないよっ。紘夜の部屋にお花、飾ろうと思って.....」

実織様は慌てて花を見せる。

ふわり

ゆらり

と、彩る花が実織様の腕の中で揺れる。

「花など飾る必要はない」

ピシャリと言い切る紘夜様。

「え？ 何で？ こんなに綺麗なのに。花が部屋に飾ってあったら、きっと心が和むよ？」

「和む必要は無い」

「大丈夫だよ！ 何も考えてないからっ。紘夜の弱み握ろうなんて思っていないから——あっ……」

しまった、というように口を掌で覆う実織様。

実織様、もう遅いです……。

「ふうんそんな事考えていた訳か」

口の端をあげ勝ち誇ったかのようににやりと笑う紘夜様を前に、実織様は怯えた子猫のように、小さくなったように見えた。

「で、でも…花……いいよ？ 綺麗だし、和むよ？」

実織様はビクビクと小さな声で話し、紘夜様を見上げる。

大型犬の前で丸くなった子猫のようで、可愛らしくて、私は笑みが零れそうになるのを必死にこらえた。

「まだ言うか。さっさと部屋に戻ってマナーの練習でもしてろ」

そう言って紘夜様は部屋に戻ろうと、扉を開けると、

「じゃ、じゃあこれだけでも。気持ち落ち着くよ。そんなにイラついてたら、体に……良くないからっ」

紘夜様に花束を無理矢理渡し、実織様は廊下を走り出した。

「あっ、おい！」

「実織様！」

紘夜様と私の声にも振り返らず、

実織様は白いドレスについた緑の葉や、色とりどりの花びらを舞い散らし、駆けてゆく。

花びらの彩りが、

花の匂いが、

舞い上がる。

くらりと、目眩がする程に。

「……静音」

不意に呼ばれ、ハッとなる。



「す、すみません！私が行き届かないばかりに――」

「早く行ってやれ」

「え？」

「実織を頼む」

背を向けたままそう言って、

紘夜様は扉の向こうへ、消えた。

表情は見えなかったけれど、

その口調はどこか優しさが感じられて、

紘夜様の胸元で花がふわふわと揺れて、

私は込み上げる笑顔をこらえることが出来なかった。

知らないフリをして、  
思い出さないようにしていた。

紘夜が血に染まった、あの夜のことは。

だって、

思い出したら、  
考えだしたら、

止まらない。

怖くて、

怖くて、

紘夜が

いつか死んでしまうんじゃないか

そう思うと、

怖かった。

今日は約束のパーティーの日。  
終われば家に帰れる。

ずっと、  
ずっと、  
待ち望んでいた。  
はずなのに——…。

なんで？  
なんでこんなに気持ちが落ち着かないの？

家に帰れるんだよ？  
学校に行けるんだよ？  
やっと、もとの生活に戻れるのに…  
どうして…  
こんな気持ちになるの？

「とてもお似合いですよ。実織様」  
「え、そっそうかな？ なんかやっぱり照れるけど…」  
私は、静音さんに撫子色のドレスを着せてもらい、部屋で髪を結い上げてもらっていた。

「なんか、緊張してきたかも…」  
「大丈夫ですよ。紘夜様がついてます。実織様の不安は紘夜様が拭い去って下さいます」  
静音さん……  
紘夜のこと本当に尊敬して、信頼してるんだな…

思うと、胸が痛んだ。  
私は掌を見つめ、  
ぎゅっ、  
と、握りしめた。

「今日のパーティーは、久しぶりにご兄弟があちらの本宅に集まりますし、私も嬉しいです」  
私の髪を、真珠の飾りが付いた髪留めで結い上げる静音さんの笑顔が、鏡に映る。

「一え？ あちらの本宅って...？ ここでパーティーするんじゃないの？」

思ってもいない展開に、私が戸惑っていると、

「ここは別宅だ。兄と姉はここから少し離れた本宅に住んでる。パーティーも本宅主催だ」  
黒いシルエットの綺麗なスーツを着こなした紘夜が、部屋の入り口に立っていた。

「紘夜様」

「...紘、夜.....」

悔しいけど、

紘夜はカッコ良かった。

長身で黒髪の紘夜は黒のスーツが似合っていて、思わず見惚れてしまう。

でも、それを気付かれたくなくて、

視線をそらし、別のところに意識を持って行こうと私は必死だった。

「ほ、本宅とか別宅とか、何なの？ それ...。兄弟で別々って、しかも久しぶりに会うって...？」

「俺の詮索をするな。一生帰れなくなるぞ。」

もう！

また、その言葉っ！

「静音、後は本宅の準備を手伝ってくれ。こいつは俺が連れて行く」

「はい。かしこまりました」

静音さんは応えると、静かに扉を閉めて、部屋を後にした。

な、

なんか...

気まずいんですけど.....

何も話さないでいると、

一昨日の夜の事とか、あの雨の日の事とか、

なんか色々、

思い出しちゃって――

怪我.....

大丈夫なのかな？ 聞いてみようかな...

でも、きっと、

痛くても、痛いとは紘夜は言わないんだろうな。

「おい、そろそろ行くが、お前ちゃんとトイレはすませたか？」

――なっ！

私の気も知らないで、  
よりもよって！？

「こ、子供じゃないんだから、トイレくらい自分で決めて行けます！」

「それは、結構」

くっ、と笑いながら、紘夜が言う。

くーっ！

子供扱いして！

「おい、じゃあ行くぞ」

「ちょっと待って！パーティーでも、`おい、とか`お前、って呼ぶんじゃないでしょうね！？」

私は白のふわふわショールを羽織りながらそう呼び止めると、紘夜は振り返る。

「行こうか、実織」

低く艶のある声で私の名を呼び、紘夜は手を差し出した。

な、なによ...

調子狂うじゃない.....

きっと、

今の私は恥ずかしいくらい顔が赤いと思う。

紘夜は、ためらっている私の手を引き寄せると、しっかりと握りしめた。

その時、

少しだけ紘夜が、微笑んだような気がした。

「...すごい.....」

パーティー会場（紘夜のいう本宅とやら）に、紘夜の黒い車で着くと、そこは、別世界だった。

「なにこれ.....。ホントに、パーティーだ...」

紘夜のいたお屋敷の倍以上の建物に圧倒され、そのもの凄いお屋敷に、次々と入って行く、きらびやかな人々.....

とにかく、紘夜の家での日々が普通だったのではと、

ううん、質素なくらいだったんじゃ...と思ってしまう程の華やかさ。車から降りて、私は自分の立場も忘れ呆気にとられていた。

「ポケットとしてんな。行くぞ実織」

紘夜はさっさと歩き出し、華やかな人達が向かう豪華な玄関とは別の方に、向かった。

「あ、あれ？ どこ行くの？ 玄関はあっちじゃ...」

「あっちは招待客や兄達用。俺は裏」

え？

「なにそれー...」

と、

紘夜を追いかけて、ついて行くと、

次の瞬間――

ガウン！！

ガウンッ、ガウン！

耳に痛いくらいの衝撃――

聞こえたと思ったら、

私の体は、紘夜に軽々と抱えられていた。

白いショールが肌から離れ、

ふわりと

舞い落ちた。

なに？

なんなの！？

訳が分からず私は紘夜にしがみついた。わからない事ばかりで、  
私の手は、  
体は、  
震えて上手く紘夜を掴めない。

「大丈夫だ、実織。俺がいる」  
そう言って、紘夜は私を  
ぎゅっ、  
と、力強く抱きしめてくれた。

「どうやら、客の中に招待していないヤツが紛れ込んだか」  
身を潜め、  
裏庭の茂みに私を下ろすと、紘夜は辺りを伺う。

なに？

何が起きているの？

私の頭はパニック状態。  
さっきの痛い程の衝撃音がまだ耳に残っている。

さっきのって、

まさか、

「じゅ、銃声……？」

震える声が、零れた。

「ああ。音からして、ライフルじゃないな。リボルバーか。スタームルガー・ブラック…いや、  
レッドの方か？」

「ブッ、ブラックでも、レッドでもどっちだっていい！」

淡々と分析する紘夜に、

体も声も震えながら、私は言った。

「大事なことだ。銃の種類が解れば相手が特定出来る」

「特定、って、そんなに敵多いの！？」

「ん？ まあな」

そんな、あっさり.....

「俺は様子観てくる。お前はここで...」

「一人にしないでっ！」

ガッ、

と、紘夜の黒いジャケットにしがみついた。

「...しょうがねえな、好きにしろ」

そう言って、紘夜は建物の壁伝いに身を隠しながら様子を伺う。私は離されない様に、紘夜のジャケットにしがみついて歩いた。

すると、

「一ったく、歩きにくい！」

紘夜が私を一喝。

「だ、だって...」

こわ、

こわい.....

震えて言葉に出なくても、きっと、私の顔は真っ青。そんな私を、紘夜はチラと見て、溜め息。

そして、

バサッ

紘夜が黒いジャケットを脱ぎ、私に放り投げた。

「それでも着てろ」

その時になって、

私はこの十一月の寒空に、撫子色の薄いドレス一枚だったことを思い出した。

「あ、ありがとう...」

紘夜の黒いジャケットに袖を通し、

気付く、

甘い、紘夜の煙草の匂い。

ジャケットは大きくて、私をすっぽりと包み込んだ。

なんだか、

紘夜に包まれているみたいで、恥ずかしくて、自分の顔が赤くなるのが分かった。

そんな私の様子に気付いた素振りも見せず、紘夜は辺りに視線を走らせている。だから私は、紘夜の匂いのするジャケットを、

ぎゅっ

と、抱きしめた。

『大丈夫だ、実織。俺がいる』



その言葉が、声が、  
耳から、心から、  
離れない。

ドキドキしながらも顔を上げると、紘夜が後ろ腰に差していた銃を取り出し、回転式の弾が入っているところを確認する仕草をした。

その流れるように馴れた仕草に、目を奪われた。

こんな時なのに、紘夜から目がそらせない。

「実織、ここで少しだけ待ってろ」

紘夜が、警戒した姿勢のまま告げる。

「――え？ やっ、置いてかないでっ」

「大丈夫だ、すぐ戻る。この様子なら、狙撃に失敗してここにはもういない」

「だったら、行かなくてもいいじゃない！」

「狙撃したヤツの痕跡を探してくる。薬莢か何かが残ってるはずだ。それに、一応屋敷の周辺を見回ってくる。恐がりのヤツがここには一人いるからな」

そう言って、紘夜はイジワルな笑みを私に向けた。

こ、恐がりって、  
私のコト！？

むー、と私がふくれると、

「そのジャケットにしがみついて待っとけ」

そう言い残し、紘夜は軽やかな身のこなしで樹々の中に消えて行った。

残された私は、

怖いけど、でも、

紘夜を信じてここで待とうと、決めた。

と、そんな時、

私の背後にある豪邸の中、開いた窓から声が聞こえてきた。

ザザッ——

樹々の中を走り抜けながら、俺は感覚を研ぎ澄ます。

そして、

後悔した。

実織をこの場に連れて来たことを——

本来なら、

— 昨日の雨の夜に全て片付けていたのだから、もう実織を帰してもよかった。

いや、そうすべきだった。

だが、欲が出た。

綺麗な実織を連れ、並んで歩きたいと——。

そんな俺のせいで、実織を危険にさらしてしまった。

実織を、怖がらせた。

俺のせいだ。

後悔と罪悪感に苛まれながらも、目の前の事態に集中しようと感覚を研ぎ澄ます。

ライフルじゃない。

ということは、まだ近くにいる。

実織にはああ言ったが、逃がすわけにはいかない。

俺と一緒にいるところを見られた。

だから、

確実に始末しなければ、実織が狙われてしまう。

狙撃音からすると、

リボルバーの44マグナムか。

だとすると、ブラックホークだろうな。

シングルアクションだから、精確に狙撃する精密射撃向きだ。

スタームルガー社製なのは間違いない。

真影の裏で使用していたのが、主にスタームルガー社製だった。だから、いまだにスタームルガー社製を使うヤツらが多い。

「威力の高い44を使うとは、よっぽど俺に恨みがあるヤツ、か」

例えるなら、44マグナムはクマを倒せる最低限の威力を持つ弾薬としてデザインされたらしい。

こんな宴の場でも構わず、消音機「サイレイサー」、もつけずに44威力を扱うヤツら...

そして、スタームルガー・ブラックホークを好むヤツを、

俺は一人、知っている。

だがきっと、アイツならもっと確実に俺を狙撃する。

「今回は、アイツのグループに属する別のヤツか」

鈍い光を放つ黒の銃身に目線を落とし、グリップを握る力が更に強くなる。

手に馴染む、マニューリン社製MR73。

嫌な記憶が、よみがえる。

嫌な過去の枷を消し去るように、一瞬目を閉じ、耳を澄ますと、

聴こえる。

樹々の音に混ざる、自然の調和を乱す微かな物音。

見つけた。

呼吸を整え、更に鋭く感覚を研ぎ澄ますと、ふと、

ふわりと薫る。

実織の、残り香。

「ーッ」

思わず息をのむ。

実織の香りが、絡む。

まだ体に残る実織のあたたかさ。

呼吸が、乱れる。

心が、乱れた。

ーったく、

こんな時になんで.....

どうやら俺は、とんでもないオンナと関わってしまったようだ。

きっとそれは、俺の命を狙うヤツらよりタチが悪い。

よぎる実織の姿。

泣きそうに、震えていた。

そうだな。

これ以上、あいつを怖がらせたくない。

危ない目に遭わせたくない。

あいつは、

普通のオンナなのだから。

覚悟を決め、俺は視線を上げ調和を乱す対象の方向を捉える。銃の黒いグリップを軽く上に振り、馴染む握りを確かめると、

鼓動に合わせ、

ひとつの呼吸とともに、

俺は駆け出した。

「—だから、客には余興の花火だとでも伝えろ」  
背後の豪邸内から聴こえた男の人の声に、  
ドキッとした。

頭上の窓の近くから声がした。  
どうやら、私が潜む樹陰の背後にあるお屋敷内の廊下の隅で、  
誰かが話してるみたいだった。  
「まったく、こんな時に銃撃だなんて。なにやってんだ、紘夜のヤツは」  
だんだんと近づく声。

紘夜？  
紘夜が、どうかしたの？

紘夜の名が聴こえ、途端に不安になる。鼓動が速くなり体中に響くようだった。  
「だからあー、面倒な`裏、の事は、紘夜に押し付けとけばいいのよ」  
ドクン、  
次に聞こえた女の人の声が、更に私の鼓動を軋ませる。

押し付ける？  
裏—...って？

「そのために真影家の`裏事業、に関わる、紘夜用の別宅があるんだから」  
ドクン、  
裏事業—...？  
この女の人は、何のことを言ってるの.....？  
「さっきのだって、みごとに紘夜狙いでしょ。恨まれてるのは、あいつよ」  
「ただ、パーティー会場に飛び火しない様、警備を固めなくてはな」  
交わされる、  
豪邸内での男の人と女の人の声。

「だいたい、紘夜を本宅に呼んだりするからよ」  
「仕方ないだろう。あいつも一応真影家の人間だ。表向きは華族の血を引く由緒ある我々の弟だ。  
...腹違いとはいえ、な」

弟……？

腹違い……？

紘夜の、お兄さんと、お姉さん？

腹違いって、

紘夜、が——……？

訳が分からない。

裏とか、押し付けるとか、

弟とか、腹違いとか……

一体、何を言ってるの——？

「そもそも、代々金と権力に溺れ、裏で`暗殺者、の育成なんかに手を染めた罰よ」

何を、言ってるの……？

話の意味はわからないのに、ガタガタと体が震えた。

「腐敗しきっていた、真影家の`裏、を一掃すべく尽くした父を尊敬はするが、志しなかばで倒れ遺された者には、面倒なことだ」

ドクン…

「まあ、いいじゃない。お父様の遺志を継いだ紘夜が、全て片付けてくれるわ」

ドクン

「もう用済みの手に負えなくなった`暗殺者、の始末なんて、紘夜にさせとけばいいのよ」

ド、クン——

交わされる話し声が遠くなり、遠くで扉の閉まる音がした。

私は力が抜けて、その場に座り込んでしまった。

と、その時、

人の気配に顔を上げると、

紘夜が、いた。

紘夜は、一瞬だけ私と視線が合うとすぐに目線をそらす。

その表情で、さっきの会話が紘夜にも聞こえていたんだと、気付いた。

「.....あ、あの、紘夜.....」

何も言わず、持っていた銃を後ろの腰に仕舞う紘夜に声をかける。

でも、その先の言葉が見つからない。

私はどうしたらいいのか分からなくて言葉を探しながらも、視線が定まらない硬くなった表情を見せないようにうつむいていると、

ガチャ

鈍い、金属の扉の音が聞こえた。

その音に顔を上げると、紘夜が黒い金属製の扉を開け、

「行け」

そう、一言告げた。

——え？

紘夜が告げた言葉の意味が、よくわからない。

「.....もう、帰っていい。ここから外に出られる。行け、実織」

「な...なに...？ なに言って——...」

言ってる意味が分からない。

何で急にそうなるわけ？

「だ、だって、まだ何も始まってない。パーティーも...これから...」

「もう、いい。いいから行くんだ」

「なんで？ だって、まだ危険かもしれないのに...逃げるなら、一緒に逃げようよ、紘夜...」

「危険はない。ヤツは片付けた」

サラリと言う、紘夜。

硝煙の匂いをまとい、目には鋭い光が射していた。

前の私だったら、逃げ出したくなる怖さを紘夜に感じた。

でも、気付いてしまった。

その奥に、

哀しさ、寂しさ、

優しさを

秘めている事を、私は知ってしまったから――。

「……で、でも、私だけ逃げるなんて…。紘夜も一緒に逃げよう？」

「わからないヤツだな！」

鋭い紘夜の声にビクッとなった。そして気付いた時には、

私は、

紘夜の胸に抱きしめられていた。



「紘...夜.....」

ようやく、震える声で名を呼ぶ。

ドクン

ドクン

体中に鼓動が響き渡る。

ギュッ、

と、いっそう私を抱きしめる紘夜の腕が、力強くなる。

離さないで...

お願いだから、離さないで——

私はそう願った。

けど、

「.....頼む。行ってくれ」

微かに震える、紘夜の声。

「お前が今、行かなければ、俺はお前を手放せなくなる」

紘夜の言葉が、私の心に一言一言、刻まれる。

その意味が分かると、嬉しくて、涙が溢れた。

「...じゃあ.....じゃあ手放さないでよ」

私の言葉に、紘夜の体がわずかに反応した。

でも、

ドンッー

軽く突き飛ばす様に外へ繋がる扉へと、紘夜は私を突き放した。

「紘夜ッ！」

私が名を呼ぶのと同時に、

紘夜はその黒い格子扉を動かし、

ガシャン

私を外へ出すと、扉は硬く閉められた。

「紘夜！ 紘夜——！」

何度、  
名を呼んでも、振り返らない。  
どんな表情でいるのかも分からない。  
でも、煙が――  
絃夜の後ろ姿を、煙草の煙が包んだ。  
区切りの、合図。

これで、お終い。  
そういうこと？  
ねえ、絃夜...

あっという間の出来事に、  
私は格子扉にしがみついたまま動けずにいた。  
いつの間にか絃夜の姿は消え、煙草の甘い香りだけが、残った。

「実織様」  
懐かしい声がして、振り返る。  
そこには、静音さんの姿。  
「し、静音さんっ...」  
思わず駆け寄ろうとすると、静かで感情のない静音さんの表情が、私の足を止めた。  
「静音さん？」  
私の呼びかけに応える事はなく、  
静音さんは、  
「車を用意しました。実織様のお宅まで、お送り致します」

え？  
な、んで...？  
静音さんまで、そんな事言うの？

哀しくて、寂しくて、  
急に、遠くに感じて、  
涙が、流れた。  
でも、静音さんの表情は変わらず、用意されたタクシーに私を促した。  
私は、もうどうしたらいいのか分からなくて、促されるままタクシーに乗り込んだ。  
タクシーは私を乗せると、何も告げていないのに走り出す。  
後ろの窓を振り返ると、  
深々と頭を下げ、見送る静音さんの姿。

その姿が、  
さよならだと、そう、告げているようだった。

どうして？  
どうして？  
分からない事ばかりで、頭がおかしくなりそう。  
でも、  
懐かしい匂いがして、ハッとなった。

紘夜の、  
甘い煙草の匂い。

見渡したけど、どこにも紘夜の姿はなく、高齢の運転手さんが前をずっと見ているだけ。  
あたりまえだ。  
私しか、乗ってないんだから――  
そう思って、自分の体を抱えて、気付いた。

紘夜の、黒いジャケット。  
私が羽織っている紘夜のジャケットから、紘夜の煙草の匂いが、した。

「...紘...夜...紘夜...」

羽織ったジャケットにしがみついて、  
私は、泣き続けた。

あの日は、  
冷たい雨が降っていた。

秋の冷たい雨が。

いや、当たり前か、  
俺が仕事をする日は、いつも雨だ。

雨の日にしよう決めていた。

彩り豊かな傘の色に俺の黒い姿は紛れ、  
雨音が消音器 `サイレンサー、付きの微かな銃声を消し去り、雨の匂いが硝煙の匂いを消し去り、

雨が、流れた血を洗い流してくれる。

いや、  
流れた血は、  
罪は、  
消えやしない。

どんな雨でも――。

何度、  
何度繰り返そうと、慣れる事はない。  
俺の目の前で流れる血が、罪となる。

一生、変わる事のない、ただ繰り返すだけの毎日。  
そんな変わらない日のはずだったのに、  
この日は、違った。

「大丈夫だよージュン兄。周り灯で明るいし、暗い道はダッシュで帰るから」

路地裏に停めた車の中で煙草を吸っていると、開けた窓から、元気な笑い声が聞こえてきた。  
気になった。

元気な笑い声。  
綺麗な横顔。  
楽しそうに、話す姿。

どうやら話す相手は、家族、兄妹のようだ。  
家族とは、  
兄妹とは、  
こんな風に、楽しく話せるものなのか。  
俺の知らない、世界。

気付いた時には母はすでに亡く、家族と呼べるのは父親だけ。  
その父親も8年前に他界し、  
遺されたのは、兄と姉、そして俺。だが、  
腹違いの俺達は、キョウダイと呼べるような関係ではなかった。

屋敷が一つ与えられ、  
そして父親の遺志が、遺った。

父親の遺志を継ぐ事に抵抗は無かった。唯一、自分と父親を繋いでくれる物の様に思えたから。  
例えそれが  
他人の血を  
自分の血を  
流す、  
罪深きものだとしても――。

予想外だったのは、あの冷たい雨の日に、あのオンナに逢った事。

いや、通り過ぎる事も出来た。  
だが、  
彼女があまりに楽しそうに話すから、  
彼女があまりに楽しそうに笑うから、  
気になって、  
俺は手をさし出した。

それからの日々は、まるで屋敷に花が咲いた様。  
くるくると変わる、  
四季折々の花が、  
いっぺんに咲いた様に。

実織は、  
俺の心に咲いた花。  
陽の光を浴びれば元気になり、  
水を怠ると、しぼんでしまう。

優しく包み込めば、綺麗に咲き続ける。

だから、  
手折れば、枯れてしまう。  
俺の傍にいたら、  
実織は、  
枯れてしまう、花だ。

そう思って、突き放した。

本当は、抱きしめた手を離したくなくて、  
もっと強く抱きしめたくて、

でもそれでは、  
花は枯れるだろう。

俺が与えられるのは水ではなくて、  
赤く流れる血の色だけなのだから――

ねえ紘夜。

私はこの1週間で、

怖い思いも  
哀しい思いも

楽しい思いも  
嬉しい思いも

たくさんあったよ。

でも、

今のこの想いは  
なんなのかな？

ねえ、教えてよ。

紘夜



自宅に着いた私は、驚く事ばかりだった。

「おう、お帰り実織。体の調子は大丈夫か？」

私を出迎えたのは、

ジュン兄の素っ気ないけど、あたたかくて優しい言葉。

「...う、うん。た、ただいま...」

「なんだ、ずいぶん綺麗な格好してんな」

「え...うん、ちょっと...」

てっきり、ジュン兄のことだから怒られるかと思った。

今までどこで何してた！とか

人様に迷惑かけて何やってんだ！とか

一週間帰らなかったんだから、色々、聞く理由はあるはず。

それなのに、

あのジュン兄が、この落ち着いた様子って、

どういうこと？

「お前、体調崩して、あの真影家に世話になったんだって？今度礼に行かないとな」

私の顔を見たジュン兄が、私の頭をくしゃくしゃと撫でた。

「真影、の言葉に驚き、私はジュン兄を見上げた。

「ジュン兄、知ってるの！？ 真影家のこと！」

「ん？この辺りじゃ有名な金持ちだろ。真影財閥っていったら」

ああ.....

「表、の方、かー...」

「...怒らないの？ジュン兄？」

「怒る？なんで？」

「だって、一週間も帰ってこなかったし...。電話でジュン兄、心配してたから...」

「あー、そりゃ心配はしてたさ。でも、毎日連絡もらってたしな。真影家の人から」

——えっ！？

「連絡、って？...私の電話じゃなくて、真影家から？」

「ああ、FAXでな。毎晩お前の様子を教えてくれた。時には写真入りでな」

ほら、と、

ジュン兄は、束になったFAX用紙を私に見せてくれた。

そこには、事細かに私の一日の様子が書かれていた。何時に起きたとか、食欲はどうとか、何を

して過ごしたか、とか

紘夜の字で、書かれていた。

何をして過ごしたかっていう所は、体調を崩してお世話になっていた事になっていたから、ほとんど体調の事とか、寝て過ごしたとか、そんな感じに変えられていたけど、他は、私の真影家での様子そのものだった。

写真の私は、

白いワンピースを着て、

庭の花束を抱えて、

笑っていた。

思い出す、真影家で過ごした日々。

何度か静音さんと庭で花を摘んだ。そして、その摘んだ花を紘夜の部屋に飾った。

最初は、大人しく部屋でマナーの勉強でもしてるとか、無駄な事はするなとか、そんなコトばかり言っていたけど、

いつからか花を飾ると、

ありがとう、と

そう、言ってくれた。

その言葉を聞いたときは、

嬉しくて、

嬉しくて、

私も紘夜に、ありがとう、と言ってくれて、

ありがとう、と言った。

そしたら、

『なんだそりゃ、礼に礼を言うヤツがいるか』

って、紘夜が笑った。

それが、紘夜の笑顔が

嬉しくて、

嬉しくて、

気付くと、

私の涙がFAX用紙にポタポタと落ちて、ジワリと広がり、染みになった。

「実織！？ どうした？」

驚いた様に、

ジュン兄が私の肩を掴んで、顔を覗き込んだ。

肩が、熱い。

ついさっき、絺夜に抱きしめられた体が、

熱いよ。

熱いよ、絺夜——。

「実織...？ なんか、あったのか？」

「...何でもない、何でもないよ。ジュン兄...」

疲れたから、

と、ジュン兄の前から逃れる様に階段を駆け上がって、自分の部屋に入った。

懐かしい、自分の部屋。

あんなに、

あんなに

待ち望んだ自分の家なのに、

どうして、

どうして

こんな気持ちなの？

どうして、

涙が止まらないの？

涙でかすむ目で、部屋を見回す。

きっと、

きっと懐かしさが、私の気持ちを埋めてくれる。

そう思って—...

「——ッ!？」

でも、

視界に入った壁に息をのんだ。

そこには、綺麗に掛けられた、私の制服。

あの雨の日に、びしょ濡れになって、

絺夜が—.....

溢れた涙が、また頬を伝う。

何もかも呆れるほど用意周到で、いつもの生活に戻る準備は、すべて整っていた。

でも、こんなにも、紘夜の匂いが、私を包む。まるで、  
紘夜に抱きしめられているかの様に――...

思い出すのは、

紘夜の匂い。

紘夜の仕草。

紘夜の声。

紘夜に抱きしめられたときの、ぬくもり。

紘夜のぬくもりが、私をこんなにも熱くする。

それ以外、

何も、何も考えられないよ。紘夜。

バンッ！

気付いた時には、部屋を飛び出し、外に出ていた。

「実織！！」

後ろで、ジュン兄の声が聞こえたけど、構わず走った。

もと来た道を、走り続けた。

走って、

走って、

呼吸が苦しくなるまで、走って。

足が、止まった。

もう、戻れない。

これ以上、

道も、

自分が何を思って走り続けるのかも、

何も、分からない。

分からなくて、

足が、止まった。

「ふ、うっ...うっ、」

涙だけが、溢れる。

溢れて、流れ続ける。

でも、この涙が何なのかも、分からなかった。



「ホント、よかったね」

「うん。実織が体調崩して一週間も休んだ事ないから、心配したんだよ」

3日後、

久しぶりの学校では、友達が心配してくれてた事を知った。

「心配かけてごめん…。ありがとね」

みんなに、

もう大丈夫元気だよ、って笑ったけど、

自分でも気付いてる。

うまく笑えていない事。

「どうしたの？ 実織、まだ体調よくない？」

「…ううん、違う。大丈夫だよ」

「なんか、あった？」

うん、

あった。あったよ。

いろんな事が……。

「どこか、お金持ちの家でお世話になってたんでしょ？」

「そこで、イヤな事でもあった？」

私は、無言で首を左右に振った。

怖い事、驚いた事はたくさんあったけど、

今はもうイヤな事じゃない。

それは確かだった。

「なにか忘れ物でもしてきた？」

忘れ物、

友達のその言葉に、鼓動が、ドクンと鳴った。

忘れ物

「そう、なのかもしれない……」

ポツリと零れた言葉。

「え！？ 大事なもの？」

うん。

きっと、とても、とても大事なもの…

「取りに戻る？ ついてこうか？」

でもね、

どこに忘れてきたのか、

何を忘れてきたのか、  
わからないの。

友人達の心配してくてくれる言葉に、  
大丈夫と、笑って、答えた。  
きっと、  
またうまく笑う事が出来ていない。

でも、  
例え下手でも、  
もう大丈夫と、笑う事しか出来なかった。

ザァァー———.....

授業が終わり、

帰る頃には、雨が降り出した。

「あー、降ってきたよ。ヤダな〜」

「傘持ってきた？」

「帰りに『楓糖（メープル）館』でケーキ食べてかない？」

「実織の復帰祝ってことで、ね？」

「え？」

教室の窓から雨を見ていた私は、友達の言葉に振り返る。瞬間、

視界の端に、

見慣れた、黒い車が、学校の門の近くに止まっているのが、見えた。

「ごめん！今日は用事があって、また今度誘って！ごめんねっ」

友人達に誤りながら机の上の鞆を掴み、走った。

走って、

走って、

雨に濡れたまま黒い車の傍に向かうと、白い傘が私を包んだ。

「こんなに濡れて、風邪をひいてしまいますよ？ 実織様」

穏やかで、綺麗な声が私にかけられる。

「静、音さん...、どうして？」

静音さんは、

濡れた私の髪や制服を、淡い紫色のハンカチで拭いてくれた。

そして気づく、

静音さんがもう片方の手に持つ、紅い傘。

この紅い傘は、あの紘夜と出逢った、雨の夜に私が落としたものだった。

「実織様にこの傘とこの携帯電話を届けにまいりました。紘夜様が、実織様に返すように、と」

差し出された紅い傘と、鮮やかなピンクのケータイを受け取る。

紘夜、が...？

探して、見つけてくれたの？

「.....どうして、学校に？」

私は紅い色の傘の中で、静音さんに尋ねる。

「実織様が無事元の生活に戻られたか、気になって...。紘夜様に様子を見て来る様、頼まれま



した」

「え、紘夜が？」

「本当は、実織様に気づかれない様に、との事だったのですが、...わざと実織様に見つかる様に車を止め、傘をお渡ししようと」

「どうして.....」

「実織様に、紘夜様を救って欲しくて一...」

救う？

私が、紘夜を？

「紘夜、が？ どうかしたんですか？」

「いえ...何も。いつも通り、...元の紘夜様に戻られました」

元の、紘夜？

「人を必要以上に近づけず、何かを一人で抱え、...どこかつらそうで...。そんな元の紘夜様に、戻られました」

そう告げる静音さんが悲しそうで、  
ツラそうだった。

「紘夜...元気じゃ、ないの？」

震える、声。

紘夜の名を口にするだけで、  
それだけで、  
こんなにも一.....

「.....さあ、どうでしょう...？」

寂しげに、静音さんは答える。

「さあ...って、どういうこと？」

「...紘夜様は、実織様がいなくなられてからというもの、仕事とっては、出掛けられる事が多く、ほとんど帰ってはきません」  
仕事、って、まさかー...

よみがえる。

紘夜をまとう硝煙と、血の匂い。

紘夜、

なにしてんのよ!?

静音さんにこんなに心配かけて、  
何して――...

鞆を持つ掌に力が入る。  
握りしめる掌が、痛い。

違う。  
私こそ、何してるの？

「.....静音さん、紘夜の居場所は？」

震える、掌。

「わからないんです...。昨日の深夜、帰宅された紘夜様が、実織の様子を見てきて欲しい、と言  
い残し、次の朝にはもう、姿がありませんでした」

「それから、紘夜、帰ってないの？」

「...私の知る限りでは」

紘夜！

名を叫び、呼び戻したい。すぐにでも。

なに心配かけてんのよ！

って――.....

でも、

「...ごめんなさい。わからない、わからないんです、私にも...」

なにも、知らない。

紘夜のこと。

何を想って、

どこへ向かっているのかさえ...

「すみません。実織様を困らせるだけですわね...」

静音さんは、少し頭を傾げ、寂しそうに笑った。

「紘夜様が戻られたら、実織様は無事だと、元気に過ごしておられたと、伝えます」

ううん...

違う、違うよ。

「元気じゃ、ない。元気になんてなれないよ」

紘夜が、

紘夜がいなきゃ、ダメだよ、私。

「実織様も、紘夜様と同じなのですね」

「え、」

私と紘夜が、同じ？

「お二人とも、共に過ごしていた時の方が、いい表情をしていました」

そう言って、

静音さんは持っていた紅い傘を私に持たせてくれると、

あの日の様に深々と頭を下げ、黒い車に乗って、行ってしまった。

私は遠くなる黒い車を、見続けた。

ずっと

ずっと

見えなくなっても...

静音さんが持たせてくれた紅い傘。

雨粒の音が、どんどん強くなっていった。

十

「お、前...真影の者、かー」

ギリギリと闘争心をあらわにしていたヤツが、  
俺の銃に視線を移すと、

少しの恐怖心をみせた。

俺の銃は、  
たったひとつの父親の形見。

俺が父親の遺志を継ぐ者だという証拠。

なあ、父さん

俺がちゃんと  
真影の闇を終わらせる。

だから安心してくれ。

俺が一人で、終わらせる。

もう、  
誰も巻き込まないからー。

「ざけんな！お前ら真影がオレ達を造ったんだろうが！それを今更ー」

路地裏に追い詰めた男は、  
スタームルガー社製のオートマチック拳銃を俺に向け、叫ぶ。

「ーああ、だから俺が終わらせる」

鋭く睨み、  
冷たく低い声で、  
俺は男に最後の言葉を告げる。

そして何の感情もなく、  
何のためらいもなく、

俺は

トリガーを引いた。

†

ザァァー——

紅い傘をさし、  
ぼんやりと、帰り道を歩いた。

『紘夜様を救って欲しい』  
『紘夜様の実織様の様子を—...』

『紘夜様と、実織様は同じなのですね』

思い出すのは静音さんの言葉ばかり。

紘夜と私が、

同じ？

だったら紘夜も、こんな風に私を想ってくれたりしているのかな？

『バーカ、誰がお前の事なんて考えるかよ、メンドクサイ』

紘夜の声が聴こえてきそうで、少し顔が緩んだ。  
言いそう、紘夜なら。

思い出ただけで、  
考えただけで、

こんなにも心が揺れ動く。

『お前が今、行かなければ、俺はお前を手放せなくなる』

もう、何度思い出したかわからない言葉。  
思い出して、  
いつも涙する。

紘夜、  
紘夜、

逢いたい。

イジワルで怖い紘夜。  
突然優しくなる紘夜。

傷だらけで、血だらけの紘夜...

また、  
あんな風になって倒れてないよね？  
大丈夫だよな？

揺れて、  
揺れ動いて、  
おかしくなりそうだよ。

紘夜  
紘夜――...

ザァァァ――

雨の中、  
私は泣き崩れた。

転がる、紅い傘。  
冷たい雨。  
雨に濡れながら想うのは、紘夜の事ばかり。

そして、思い出す。

いつも、雨。

紘夜と、出逢ったあの日も。  
紘夜がケガをして帰ってきたあの日も。

すべて――

「――...ッ」

ガタンッ  
道沿いに重ねられた木箱につまずきながらも、立ち上がる。

...まさ、か――...

確信なんて、ない。

でも、  
心の想いだけが、私を動かした。

バシャッター...

水溜まりも気にせず、  
転がる紅い傘にも目もくれず、

走った。

あの日、  
冷たい雨の中絃夜と出逢った、

あの路地裏に――。